ヒゲのない猫

蒼井果実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒゲのない猫

【Ｎコード】
Ｎ２１３３Ｇ

【作者名】
蒼井果実

【あらすじ】
小学６年生の石井貫太郎は学校生活が退屈でつまらなかった。一方で隣の席に座る鈴原千博は貫太郎のノートに落書きをすることで夢中だった……。

ｆｉｌｅ１：カナヅチカンナタロウ（前書き）

魔王の降臨も伝説の剣も存在しない平凡な日常の中で起きる物語です。これまでに幾度も世界の危機が救われる場面を読まれてこられた皆様、まったりと気晴らしにどうぞ。

file1：カナヅチカンナタロウ

夜更かしと昼寝が何よりも大好きだった僕にとって、小学校で過ごす時間はもとから性に合わなかったのだと思う。四十五分の授業と五分の休憩を繰り返す規則正しい毎日は拷問に近かった。きっと今ならば耐えられないに違いない。特によく晴れた青空を見つけると、何でこんな天気の良い日に自分は授業を受けていなければいけないのだろう、という気分にさせられた。それはあの日も同じだった。

六月のよく晴れた午前中、僕は社会の教科書にひじを乗せ、頬杖をつきながら窓の外を眺めていた。

「コラ、石井貫太郎」加藤佳子先生は僕の頭を出席簿で叩いた。「黒板は窓の外にないぞ」

どうせ教える気はないのだろう。自分のつまらない授業を棚に上げてあんまりだと僕は思ったが、体は反射的に従順な態度を示していた。これが六年間で教えられた一番の成果だった。

「ん？」

仕方なく板書を写そうとノートに目をやった僕は右端に描かれた落書きを発見した。自分が書いたものではない。

先生が通り過ぎた後で隣に座っていた鈴原千博が話しかけてきた。

「可愛いでしょ。それ昨日考えたんだ」

「犯人はお前か」

鈴原とは四年生の時からずっと同じクラスで、このとき以外にも何度か一緒の班になったことがある。僕が話すことがある数少ない女子の一人だった。

「ニャン太っていいます。よろしく」

「猫か、宇宙人かと思った」

言われて違和感の原因を突き止めた鈴原はさらに何かを描き足そうとした。
「ヒゲを描かせて」鈴原は言った。
昨日買ったばかりのノートだったので、当然僕は許さなかった。筆箱から取り出した消しゴムで描かれた絵をためらいもなくゴシゴシと擦った。しかしそれがなかなか無くならなかった。
「まったく。落書きなら自分のにしろよな。……げっ！」
火星からきた宇宙人、もといヒゲのない猫。よく見たら、それはボールペンで描かれていた。ご丁寧に『ニャン太』と名前まで記されていた。
僕が睨みつけると鈴原はシッシッシッとしてやったりの表情で笑った。

給食の時間も僕にとっては苦痛だった。好き嫌いせず食べるようにと命令される。僕は牛乳が苦手だった。
「まだ少し残ってる。ちゃんと全部飲んでよ」
食事の指導は先生だけで充分だ。それなのに好き嫌いなく何でも食べる鈴原は毎日僕の牛乳瓶を凝視して文句をつけてきた。
僕は口を尖らせて反発した。
「こうやって少し残しておけば、給食のオバサンが恵まれない野良猫達に飲ませてあげられるだろ。寄付だよ、寄付」
「嘘つき。そんなこと心にも思ってないくせに」
お前のニャン太も飢えから解放させるぞ、とヒゲのない猫の絵をからかってみると、予想通り鈴原の眉毛はさらに吊り上がった。
話題を逸らそうとしたのか、『それにしても』と同じ班で学級委員の鮎川典子は箸を止めて言った。
「天気予報が外れたわね。五時間目の体育はきっとプールよ」
あらかじめ先生から用意してくるようにと注意されていたので忘れた人はいないだろうけど。鮎川の言葉は僕から選択肢の一つを奪

った。確かに教室後ろの棚には置いてあった。使わないようにと念じてはいたのだが。
「今日は入るよね？」
僕の様子から何かを察したのか、鈴原は覗き込むようにして尋ねてきた。
しばらく考えて、僕はポツリと答えた。
「俺、今日は風邪気味だから」
すると鈴原は大袈裟な仕草で『風邪と忘れ物は石井の常套手段だもんね』とお決まりの台詞を吐いてみせた。ジョウトウシュダンという難しい言葉を使うことが小学六年生の彼女にとって心地良かったのかもしれない。こちらは何度も聞いて耳にタコができそうだった。
さらに得意げな顔で鈴原は言った。
「知ってる？　四年生のときなんか、捻挫した足を理由に一ヶ月もサボったんだよ」
「うるさいな。本当に痛かったんだよ」
長い間近くにいたため、鈴原は数多く僕の弱点を把握していた。しかし、一方で向こうの弱みをこちらはあまり知らなかった。敢えてあげれば絵が下手なところだろうか。その自覚が本人にないので、あまり利用できないが。とにかく、僕に『カナヅチカンナ太郎』というあだ名がついたのは、この鈴原千博のせいなのだ。

退屈な授業や先生のお説教、さらにいえば給食の牛乳にも勝る学校生活で一番の拷問。それは水泳の授業だった。僕は六月が来る度に憂鬱にさせられた。それが休みを挟んで九月まで続くのだ。だから僕は夏が嫌いだった。
二十五メータープールの水面は午後の風で揺れ、キラキラと輝いていた。今日が六年生になって初めての水泳の授業と言うこともあり、冷たいシャワーを浴びて腰洗い層に浸かり終えた生徒達は皆、

先生の合図を今か今かと待ちわびていた。何がそんなに楽しいのだろう。
水泳の授業は一クラスだけでなく愕然全体で行なわれた。男子と女子は右左と両サイドに分かれて並ばされていた。
最初は脚だけ浸かり、体を慣らしてから入水する。皆のはしゃぎ声を聞いてから、日除けの下で休む僕は碁石の入った笊を準備した。
「さすが見学のベテランね」呆れ顔で加藤先生は言った。
顔を水につける練習のために、また遊びのために石拾いのゲームをするのだ。僕はいそいそと他に見学していた生徒二人のもとへ行き、笊の中身を分け合った。
これから撒こうというとき、反対のプールサイドから声がかかった。
「石井、こっち！」鈴原だった。
よく見ると、他の生徒二人も同じ男子の側にいた。僕はあらためて女子の方へと向かった。
意識的か、それとも無意識にか。僕は女子の側に近づくことをためらっていた。それだけでなく視線も避けていた。何か悪い事をしているような気がしたのだ。気恥ずかしからかもしれない。
大人しく石を撒いていると、プールの中から鈴原が話しかけてきた。
「ほら、黒星が二個だよ。今年で絶対に一級をとって制覇するんだ」
検定の最高位を獲得するには規定の時間内に平泳ぎと自由形、それにバタフライか背泳ぎで五十メートルを泳がなければならない。そんなことが果たして可能なのか。蹴伸びの五メートルでつまづいている僕には、まさに未知の領域だった。
僕の心の中を見透かしたように、鈴原は意地悪く尋ねてきた。
「ところで石井君は何級だっけ？」
鈴原が僕を『君』付けで呼ぶのは、せいぜいこんなときぐらいだ。大抵は呼び捨てでだった。
僕は面倒臭い気持ちを抑えて答えた。

「こんなところで級なんかとっても、全く意味ないから」
「でも級は別にしても、やっぱり泳げた方がいいじゃん」
「俺は一生泳がないから」
「へぇ、じゃあ海でも川でも遊ばないんだ？」
指摘されて、僕は小学校一年生以来海水浴へ行っていない事に気付かされた。確かに今後将来にわたってどうなるかはわからない。しかし、それがいけないような鈴原の口ぶりはしゃくに障った。
僕はいつも皆に言う反論を口にした。
「水難事故なんて泳げない奴が被害に遭うんじゃない。泳げる奴が過信してなるんだぜ」
すると鈴原は仰向けになって水面から顔を出してみせた。手足を動かさなくても浮くことを証明したかったのだろうか。
「水死体の真似か」僕は皮肉った。
ビシャッ。周りが石拾いに夢中となっている中、姿勢を戻した鈴原は僕に水をひっかけた。
「カッコわる。いい加減カナヅチ卒業した方がいいんじゃない？」
それから先生に注意されるまで、喧嘩になる一歩手前の状態で水のかけ合いをしていた。怒っていたのは鈴原よりもむしろ僕のほうだった。隣のクラスの先生に『そんなに元気なら見学なんかしてんな！』と叱られて渋々ベンチに戻ったが、それでも腹の虫が収まらなかった。

カッコワル。イイカゲン、カナヅチソツギョウシタホウガイインジャナイ？

水泳の授業が終わり、帰りの仕度をする時間になっても、僕の気持ちは好転しなかった。いつもならこのくらいの言い合いは始終である。カナヅチをネタにされたときも去年まではこれほどまで重く受け止めなかった。しかし、今日に限ってはどこか勝手が違っていた。頭の中で鈴原の言葉が何度も再現され、その度に胸の奥がジグ

ジクと痛んだ。
「大丈夫？　顔色が悪いみたいだけど」
僕の様子を見かねたのか、学級委員の鮎川が声をかけてきた。
「風邪気味だから、帰って寝るよ」
答えてすぐ僕は鈴原を一瞥した。無関心なのか、黙々と机の中の教科書をランドセルへと移していた。
そんな彼女があらためて僕を批難したのは掃除の後だった。
「石井は逃げてると思う」
突然のことで驚いたが、僕はすぐに態勢を整えた。
「逃げてるって、何がだよ」
「何でも、何にでも」
「人間なんだから苦手なモノのひとつやふたつくらいあるだろう。お前はないのかよ？」
「私は逃げてないもん」
こんなときに弱み握っていれば言い返せるのに。鈴原の欠点を知らない僕は歯がゆい気持ちにさせられた。
そういえば、と言って近くにいた鮎川が火照った僕の顔を見た。
「石井がプールに入らなくなったのって、一年の二学期からだよね」
イシイガプールニハイラナクナッタノッテ、イチネンノニガッキカラダヨネ。
ビクリ。言葉を反芻した後、僕の体は途端に硬直した。
この鮎川は、学級委員は僕が泳げない原因を知っているのだ。もう五年も前のことなので、誰も憶えていないと思っていた。自分自身、忘れようと努力していた。しかし、それでも優等生の頭にはしっかりと記憶されていたのだ。
何の事かと鈴原は不思議そうにしていたが、苦悶に満ちた僕の表情を見て鮎川は閉口した。
「学級委員、掃除終わったんなら帰っていいよな」
ランドセルを背負い、僕は許可を待たずに教室を飛び出した。バランスを崩しそうになりながらも階段をかけ下りて、下駄箱から運

動靴を引っ張り出した。家に帰りたい。学校の敷地から一刻も早く出たくて仕方がなかった。

小学一年生の夏、僕は葉山の海で飼い犬を死なせてしまった。ゴムボートに乗って沖へ出たいとせがんだのが間違いだった。

大波でボートが裏返しになったとき、その勢いで僕の浮き輪はいとも簡単に体から外れてしまった。もしそうでなければ、泳ぎの上手な父は犬のタロウを助けたに違いない。このときの事を思い出すたび、僕は後悔に打ちのめされる。そしてまたいっそう海が嫌いになってしまうのだ。

「貫太郎、電話だよ！」

一階から発した母の声で、二階の僕は久々にみた事故の夢から解放された。どうやらベットでうつ伏せになっているうちに眠ってしまったらしい。枕には涙の跡がついていた。

窓の外に目を向けると、まだ夜だった。照明をつけて時計を確認すると、針は八時半を過ぎていた。

「夕飯くらい、降りてきて一緒に食べなさい」

母の小言を聞き流して、ねむけ眼で受話器をとった僕は、意外な人間の声に驚かされた。

急に心臓の鼓動が激しくなり、息が苦しくなった。とりあえず何か発しようと僕は言葉を探した。

「どうして鈴原が？　連絡網は確か米山だったはずだけど」

連絡網は篠崎浩二だった。それでも鈴原にそんなことを指摘する様子はなく、何だか深刻そうな雰囲気が電話越しから伝わってきた。こちらと同じように緊張しているのだろうか。いつもとは違い、どこか物静かな印象を受けた。

しばらく沈黙が続いた後で、ポツリと小さな言葉が聞こえた。

「今日のことゴメン。アユから聞いた」

アユが鈴原の友人、学級委員の鮎川を指すことを僕は知っていた。

あの後、彼女は喋ったのだ。
僕は言葉を失って、何も言えなくなってしまった。

ｆｉｌｅ１：カナヅチカンナタロウ（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。『勝手にランキング』という設定を加えました。押すとランキングが上がる？らしいので、よろしくお願いします。

file2：ピーマンと自転車（前書き）

いつもと変わらないちょっとした言い合いがまさか深刻な喧嘩に発展してしまうとは、誰も予想していなかった。貫太郎がカナヅチなのには、愛犬の事故死という理由があったのだ。それを友人から聞き、知った鈴原千博は謝罪の電話をかけた。

file2：ピーマンと自転車

明日の土曜日なんだけど、よかったら一緒にプール行かない？
十時半に駅前で待ち合わせという約束は鈴原が電話でした提案で、僕は『行く』とも『行かない』とも答えずに電話を切ってしまった。余裕がなかったのだ。とにかく時間が欲しかった。
結果からいうと、僕は誘いを受けなかった。今頃待っているのだろうと罪悪感を覚えながらも、時計の針を見つめたまま動けなかった。自分自身が利己的で弱い人間だと悟った。最低だと感じた。
月曜日、隣に座る鈴原は土曜日のことを何も口にしなかった。こちらがよそよそしくして先手をとらないせいか。会話もなく、喧嘩もなかった。今更ながら、とても自分達以外の周囲が賑やかなのだと気付かされた。
火曜日になり、言葉を交わさないまま土曜日になった。僕は相変わらず水泳をズル休みしたが、もはや鈴原は何も言ってこなかった。ノートの落書きもあの日のままだった。ヒゲのない猫は何枚もページを重ねられ、捲らなければ見えなくなっていた。

こうして時間だけが過ぎていくと思い始めた土曜日の朝、母親に叩き起こされた僕は自宅の玄関で鈴原の出迎えを受けた。
先週すっぽかしたプールへ誘いにきたのだ。何の前触れもない突然の出来事だったが、僕の心は面倒臭さや憤りよりも、むしろ嬉しさの方が強かったと思う。それでも泳げないと言う事実が僕を不安にさせてはいたが。
水着の入った袋を握らされて、市営プールへと向かった。市内に住む小学生は無料で入れるのだ。自転車でも行ける距離だったが、鈴原が徒歩だったので電車を使うことにした。
気まずい空気を押し流そうと、僕は思い切って口を開いた。

「休日使ってまで、そんなに俺が泳げない事を笑いたいのかよ」
よほど暇なんだなと悪態をついたが鈴原は何も言い返さなかった。
今までどうやって接していたのだろうか。僕は悩んでしまった。空の飛び方を忘れてしまったニワトリのように、また浜に打ち揚げられたクジラのように、もがくようなどうしようもないぎこちなさが常にあった。少なくとも一週間前まではこんな事を感じずに付き合えていた。それが欲しくてたまらなかった。
切符を買って電車に乗り込み、隣の駅で降りる。ただそれだけの事なのに、僕の心は興奮しているようだった。閑散とした車内からみえる鮮やかな青空は流れる見慣れた街の風景を一変させていたのだ。
まだ梅雨は明けていないが夏だと感じられた。普段家で怠惰に潰す土曜日とはまるで違っていた。時間を束縛されているはずなのに、こちらのほうが数倍も自由に感じられた。いつも鈴原はこんなに充実した週末を過ごしているのだろうか、と羨ましく思えたりもした。
これから起きることは素晴らしいものかもしれない。不思議なことに、一抹の期待が生まれていた。

良い天気のため、市営プールは人でごった返していた。僕らの他にもスクール水着の小学生が幾人か確認できた。他の学校の生徒もいた。
数年ぶりに足を入れたプールの水は太陽に温められたせいで思ったほど冷たくは感じなかった。怖くもなかった。
僕が胸まで水に浸かると、鈴原は後からドボンと勢いよく入った。
「流れるプールにいこうよ」鈴原は言った。
市営とはいえ設備は充実していた。長方形の五十メートルはもちろん、ウォータースライダーや小さな子供用の浅いプールまで揃っている。アイスクリームやジュースなどを買える売店もあった。
赤く焼けた肌が痛みを感じることも忘れて、僕は閉館まで遊んだ。

こんなに夢中になったのは何年ぶりだろうかと思った。こんな毎日が続いてずっと欲しいと思うほど、とても楽しかった。
駅へと向かう夕暮れの帰り道、不意に会話をしていた鈴原の表情が沈んだ。
「この前はごめんね。酷いこと言って」
いつの間にか僕は鈴原と話しができていたことに気付かされた。そしてこの状態をまた壊したくないと思った。
僕は言った。
「そんなこと気にすんなよ。俺が泳げないのは事実なんだし」
口に出して、あらためて胸がジクジクと疼いた。それでも平静を装って、笑ってみせた。
「今日は久しぶりに楽しかったよ。泳げればもっと楽しいんだろうな」
「泳げるよ！」
流れるプールでは浮いていたのだから、緊張さえ抜ければ泳げるようになると鈴原は言った。彼女の目は真剣だった。その力説に僕は困惑した。
カンナ太郎というあだ名を広めたのはずっと鈴原だと思っていた。しかし、よく考えてみると、彼女からそう言われた記憶が僕にはあまりなかった。だから『カナヅチ』と呼ばれたとき、無性に腹が立ったのかもしれない。水泳の授業に出ないことを批難されても、泳げない事自体を罵られたのはあの日が初めてだったのだ。
「お前はいいよな」僕は溜め息混じりに呟いた。「好き嫌いも無いし、何でも出来るし」
すると意外だったのだろうか、鈴原は少し驚いたようにこちらをみて、それから首を横に振った。
「私にだって嫌いなものはあるよ」
ピーマンと正面を見たまま、鈴原は表情を変えずに言った。
「嘘だ。いつも食べてるじゃんか」
「食べてるよ。でも嫌いだもん」

それに、と言い出しかけて鈴原はいったん口を閉じた。それでも打ち明けたい気持ちが強かったのだろうか。しばらく考えた末、彼女は囁くように小さな声で言った。

「私、自転車に乗れないんだ」

ｆｉｌｅ２：ピーマンと自転車（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ３：秘密の約束（前書き）

鈴原千博に誘われ、市民プールに入った主人公の貫太郎。最初は恐る恐るであったが、徐々に水に慣れ、楽しく遊ぶことができた。そして帰り道、千博は自分の弱点を打ち明けた。彼女は自転車に乗れなかった。

ｆｉｌｅ３：秘密の約束

鈴原が自転車に乗れないのは父親の仕事に関係していた。彼女がこの小学校へ転校してきたのは四年生の二学期のことで、それまでは数ヶ月で転校を繰り返していたらしい。短い期間で引っ越しをしていたため、かさばる荷物は邪魔だった。だから自転車を買ってもらえない鈴原は乗り方を知らなかったのだ。

燃えるような紅は終わりを迎え、唯一西の空の一部が薄桃色に染まるだけとなっていた。黄昏時は静かに消えていく。夕闇が夜をつくるその一瞬の光景を僕らは帰りの電車から眺めていた。

僕は帰りたいような、それでいてずっとこのままでいたいような気持ちだった。今別れて月曜日になれば、また以前と同じような付き合いに戻るのだろうか。口を聞かないよりはずっといい。そう言い聞かせても、どこか満足していない自分が胸の中にいた。僕は欲張りになっていた。

ドアにもたれた鈴原は外の景色を見つめながら僕を試すように言った。

「さっき、滑り台の所で吉田と佐野を見たんだ。月曜の朝、噂になってるかもね」

横目で探られた僕は『そんなこと気にするな』と強がって答えたが、内心ではまるで自信が持てなかった。何も考えずに黒板に書かれた相々傘を目にしたら、とる態度も違うはずだ。きっとムキになって否定して、鈴原と口喧嘩をするに違いない。その点では未然に防げて良かったのかもしれないと思えた。

答えに満足しなかったのか、淋しげに笑った鈴原に僕は焦った。

「なあ、提案なんだけどさ。競争しないか」

「競争？」

「あの……ほら、水泳だよ。俺が水泳で、お前は自転車。それでどっちが早くできるようになるか競うんだよ」

互いに教え合おうと補足した。とっさに思い付いたにしては上出来だと、自分でも感心したが、期待していたほど鈴原の反応は良くなかった。

言い辛そうに鈴原は口を開いた。

「私、自転車持ってないから」

そうだった、と僕はあらためて鈴原が乗れない原因を再確認させられた。しかし、それだけの理由で断念してしまうには、あまりにもったいないような気がした。もしかしたら泳げるようになるかもしれないのだ。

「俺の自転車を貸すよ」

「でも……壊れるかもしれないよ？」

「壊れたら直すよ。修理は得意なんだ」

それでも競争は嫌だと鈴原は言ったので、結局は僕が泳げるようになったその後で自転車の練習をすることになった。要するに僕がカナヅチのままでは、ずっと鈴原は前に進めないのだ。大きな責任を感じたが、何故かこのときは成し遂げられると思っていた。緊張さえとれれば絶対に泳げるようになるという鈴原の言葉が勇気と自信を与えていたのだ。

駅も間近になって鈴原は小さく頷いた。納得したように何度か繰り返していた。

見ると窓の外はもはや暗闇に包まれていた。そして徐々に電車の速度が落ちていった。僕は気恥ずかしさをおさえ、ホームの蒼白い光が現れるのを待った。

ｆｉｌｅ３：秘密の約束（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ４：夏の日差し（前書き）

転校ばかりで自転車を買ってもらえず、乗ることができなかった千博とカナヅチの貫太郎。そこで帰りの電車内でふたりは互いに先生となって教え合う秘密の約束をした。

ｆｉｌｅ４：夏の日差し

月曜の朝、黒板に相々傘は書かれていなかった。いつもと変らない六年一組の雰囲気がそこにあり、唯一異なるのは鈴原のいない机だけだった。

予鈴が鳴る間際になって、ようやく鈴原は教室へ入ってきた。遅くても八時十五分には登校してる彼女にとって、それは珍しかった。忙しそうにランドセルに詰め込まれていた教科書やノートを机の中へとしまっていた。

「おはよう」僕は遠慮がちに挨拶した。

すると「おはよう」とひと言だけ返ってきた。鈴原はペンケースの中を覗き込んだまま、なかなかこちらを見ようとはしなかった。金曜日までのもめごとを引きずっていたわけではない。それでも親しく接する事の出来ない見えない壁のようなものが確かにあった。僕らは先週にもましてよそよそしくなってしまった。

僕は水泳の特訓を自分から提案したものの、依然として学校の授業は見学していた。明らかに皆の泳ぎは去年に比べて上達していた。ガリ勉で運動音痴の望月でさえバタ足の練習を始めていた。もはや蹴伸びの練習をしている生徒は誰もいなかった。恥をかきたくない気持ちと、どうにかして上手くならなければという焦りが心の中で葛藤を生んでいた。早く土曜日にならないだろうか、と僕はもどかしく思った。

不運にも初めての練習日は雨となり、プールに入れたのはさらに7月に入った次の土曜日だった。

鈴原は僕にバタ足の練習からさせた。脚をピンと伸ばした状態でモモを縦に動かす。このとき、ヒザを曲げてはいけないらしい。一見簡単にも思えたそれは実際にやってみるとやはり一筋縄ではいか

ないことがわかった。すぐにモモが疲労で動きが鈍り、元気よく上下させる事が困難になってしまったのだ。
「これが上手くならないとバタ足だけでなく、クロールもできないんだ」
予想していたよりずっと、鈴原の教え方は丁寧で優しかった。最初の十分がバタ足の特訓、その後で毛伸び、さらに息継ぎの仕方。もっと乱暴に叱り罵ると思っていただけに意外だった。僕はプライドを気にせず練習に集中する事ができた。それが上達の一番の理由かもしれない。
鈴原から教えられ、段々と泳ぐ事が面白くなってきた僕は土曜だけでなく、平日も自分だけで市営プールに足を運んだ。自分ひとりで練習していると、緊張感のなさというか物足りなさのようなものはあった。ただ、今度の土曜日に彼女を驚かせてやろうという思いが強く、途中で放り出すことはしなかった。
終業式なり、通知表を手にした僕の腕は早くもこんがりと小麦色になっていた。さらにこの頃にはバタ足で二十五メートルを泳ぎきる事が出来るようになっていた。息継ぎも歪だがなんとかこなせた。
夏休みに入ると鈴原との練習はさらに増えた。学校の水泳教室が終わった平日の午後から僕の特訓に付き合ってくれた。面倒なはずなのに、決して不平を口にしなかった。彼女の肌はすぐに僕よりも濃い褐色となった。
ラジオ体操にも行かず、クーラーの効いた部屋の中で怠惰に過ごしていた去年がもったいなく思えてしまう。これまでの自分からはとても想像できない毎日だった。
まだ序盤だが、今年の夏休みに僕は満足していた。
こうして何事もなく移動教室が終わり、クロールを少しずつ覚え始めた八月第一週目の土曜日。僕は鈴原から海へ行かないか、という誘いを受けた。祖父の代から東京生まれの東京育ちで、実家が田舎にないのだと話したのがきっかけだった。
遠浅の海で波も高くなく、家の近くの林にはカブトムシも手に入

るという。そして何よりもそこには泳ぎの先生である鈴原がいるのだ。

やはりタロウのことが頭を過ぎったが、それでも僕は断ろうとは思わなかった。もう五年も昔の話だ。前に進まなければいけないという気持ちが僕の中で強く育っていた。もしかしたら泳ぎが上達して自信がついたのかもしれない。いずれにせよ、これが苦手なものを克服できる絶好の機会だと承知していた。

ｆｉｌｅ４：夏の日差し（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ５：鈴原の事情（前書き）

約束していた秘密の特訓が始まった。夏休みに入り、毎日練習をする貫太郎。そんな八月の初め、鈴原から彼女の実家に遊びに行かないかという誘いを受ける。海への恐怖を克服したい貫太郎はその誘いを受けることにした。

file5：鈴原の事情

電車は長い時間走り続けた。ビル群を抜け、深いトンネルを抜けて磯の香りがする地へと僕らはやって来た。午後の日差しを浴びた深緑と一面の青空、その間に一瞬だけキラキラと輝く水面が顔を覗かせた。もう海なのだと感じた。

窓から流れる景色を眺めていた僕は不意に車中へ視線を移した。向かいには鈴原が座っていた。彼女にとっては見慣れた風景なのだろうか。特に感動した様子もなく、縁の広い麦藁帽子を膝にのせて水筒から冷えたお茶を出していた。

お盆休みというのに帰省客の姿はまばらだった。特に僕らが乗るこの車両に二人の他は誰もいなかった。意識をするとカタンカタンという単調な走行音だけが耳に入ってきた。ボックス席に座った経験の乏しい僕は向かい合うかたちがなんだか妙に照れ臭さかった。

「親も一緒かと思った」僕は沈黙に耐えられず話しかけた。

すると鈴原は自分で注いだお茶を見つめながら、お父さんは仕事があるからと答えた。

少し不安になって僕は尋ねた。

「俺のこと、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。ちゃんとお母さんに話してるから」

鈴原はゆっくりとお茶を口に含んで、それからようやく外に目を向けた。そろそろ波の音が聞こえてくるだろうか。線路はだいぶ海辺に近づいていた。

淡い赤みを帯びた褐色の頬はすぐに消え、代わりの表情を鈴原に運んだ。その一方で落ち着いた仕草を見て僕は安心したが、やはりどこか沈んだような彼女の様子が気になっていた。しかしそれを知る術はなかった。僕はまだ十二歳。色々な意味で未熟だった。

榎本と書かれた表札の家に鈴原の母親はいた。玄関で挨拶した僕は容姿を目にして驚いてしまった。

僕の両親より少なくとも十歳は若いに違いない。ジーンズにTシャツとラフな服装で、何か料理を作っていたのか三角巾と腰にエプロンを巻いていた。オバさんと呼ぶにはまだ早い、二十代後半から三十代前半のほっそりとした美人だった。

荷物を廊下に置いた僕達二人は居間に通された。光沢のある大きな座卓が十畳敷きの和室の中央を占めていた。その上には唐揚げやサラダなどの色鮮やかな料理が多数並んでいた。

鈴原のお母さんは僕らに尋ねた。

「飲み物は何にする？　オレンジジュースとかあるけど」

僕がお願いしますと答えると、オバさんの視線は鈴原へと移った。

「牛乳でいい」無愛想に鈴原は言った。

鈴原がろくに返事もせず黙々と食事をとっていたため、会話の大半が僕とオバさんによるものとなった。しかし、とはいってもそんなに話題も多くない。学校での生活、クラスのことがほとんどだった。

会話からそれとなく鈴原の両親が離婚していたのだと知った。どうやら別々の生活を始めたのは僕のクラスへと転校してきた小学四年生の二学期あたりらしい。ショートカットが似合う黒髪の子供とは違い、母親はウェーブがはいった栗毛色のセミロングで、大人の女性の感じがした。

シャレた腕時計やプラチナのネックレス。口紅の上に重ねて塗られた艶っぽいグロスが印象的だった。もちろん、この頃の僕はそんな名称を知っているはずがなかった。ただ、いつもはもっとオシャレにしているのかもしれないと察することはできた。明らかに家の中でオバさんの存在は浮いていた。生活感があまり感じられなかった。綺麗過ぎたのだ。

トイレを探しているとき、台所でテーブルに散乱したプラスチック容器の山を僕は見てしまった。おそらくスーパーのお惣菜コーナ

ーで購入した料理をお皿に移して出していたのだろう。何も言わないが、それは鈴原も気付いているようだった。
会話を中断して、オバさんは声を上げた。
「あら！　千博、ピーマン食べれるようになったのね！」
チャーハンに入った細かく刻まれた具を見て言ったのだ。僕はあらためてよそった自分の取り皿からそれを探した。
「この子ったら、叱っても絶対口に入れようとしなかったのに」
「好き嫌いなんてしないよ」
もう子供じゃないんだから、と鈴原は遮るように言った。恥ずかしかったのだろうか。突き放したような言葉にオバさんは少し寂しそうだった。
縁側に座ると、海からの潮風が心地良くあたった。スイカを受け取った僕は頬張る前に包丁を拭く鈴原の顔を確かめた。
自分の分を手に持って鈴原が言った。
「別に珍しいことじゃないわ。よくあることでしょ」
それが両親の離婚を指していることはすぐにわかった。確かに当時小学生だった僕でも離婚という言葉はよく耳にしていた。決して珍しいことではない。しかし、はたしてそれが個人にとってとるに足らない事柄かというと、決してそうは思えなかった。特に鈴原は辛かったのではないのだろうか。
そんなとき、気まずくなった僕にむかって鈴原が言った。
「これでアイコだから」
「え？」
「弱点。だからもう私を羨まないでよね」
ピーマンに自転車、そして両親の離婚。つまり互いの弁慶の泣き所を知った僕達の関係は対等ということらしい。その為に帰省に誘ったのだろうか。
「いいのかよ」僕は尋ねた。
それが何に対してなのかを僕は濁した。鈴原も何も答えなかった。だからしばらく待った後、少し変えて続けた。

「俺が泳げるようになったら、釣り合わなくなるぜ」
すると鈴原は笑顔で言った。
「そしたら私も自転車に乗れるようになってるから」
古い壁掛け時計の針は三時十分を指していた。夕暮れになるは、まだだいぶ陽が高かった。海が待ち遠しくなり、僕達はスイカにかぶりついた。

ｆｉｌｅ５：鈴原の事情（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ６：５年ぶりの海（前書き）

実家では、千博の母親が待っていた。どうやら、離婚して別々に住んでいるらしく、目の前で交わされる親子の会話もどこかぎこちのないものだった。自分を羨まないで欲しいと言う千博に、貫太郎は気の利いた言葉を返した。いつの間にか、ふたりはお互いを労われるようになっていた。

file6：5年ぶりの海

遊泳者も疎らな、ひと気のない静かな砂浜。穏やかな波が透き通るように綺麗な水面を揺らしていた。単調に続く控えめな音は最後の記憶に残るものとだいぶ異なっていた。傷付いた心を優しく癒してくれるようだった。

「うーん、夏だぁ！」

Tシャツとキャロットスカートを脱ぎ、水着姿になった鈴原は元気一杯に一年ぶりの海へと走った。

「ほら石井も早く！」

「ちょ、ちょっと待って。まだ心の準備が」

それでもいざ目の前にすると、やはり僕の心には不安が再燃していた。タロウを失った海とは違う。あの頃とは違い、僕もいくらかは泳げるようになっている。そう言い聞かせても、まるで別の人格が乗り移ったかのように足が震え、思うように動かなかった。

波が迫ると触れる間際で後ろに飛び退き、なかなか入ろうとしない僕に鈴原は少し苛立った様子で言った。

「そんなんじゃ一生入れないよ」

「そんなこと言ったって……あっ！」

鈴原は駆け寄り、反論をしようとした僕の腕を掴んで引き込んだ。海水が五年ぶりに僕の足へあたった。掻き消されて衝突音は聞こえなかった。心臓が止まりそうな時間は一瞬で過ぎ去り、くすぐったい感覚が土踏まずに残った。

「どう？」

鈴原が心配そうな顔で僕に尋ねた。

「うん、大丈夫……みたいだ」

意思をもって人を殺めることは決してない。海は魔物でも怪獣でもなく、ただ自然のひとつとしてそこにあった。

くるぶしからヒザ、ヒザからモモへと、腰のひけていた僕は少し

ずつ前に進み、海の感覚を取り戻そうとした。
「こんなとき、ドラマだと溺れたヒロインを助けようとして吹っ切れるんだよね」
僕の様子に安心した鈴原はオチャラけて言った。そして何を考えていたのか、少し無口になったりもしていた。しかし、その一方でこちらはそうならないで欲しいと願っていた。まだクロールが不完全なのだ。救出するにもバタ足では格好悪すぎる。
「屈んで肩まで浸かってみたら」
「ああ……うん」
波が唇にあたったついでに目を閉じて顔を浸けてみた。太陽に熱せられた顔の肌が冷やされて、ところどころがヒリヒリと感じた。
「泳げるようになったらさ。いいトコに連れてってあげる」
鈴原はそう約束して、検定で行なう背泳ぎの練習を始めた。僕がどこかと訊いても秘密と言って教えてくれなかった。
決してドラマや映画のようなショック療法ではなく、僕はかつてタロウを奪った海にゆっくりと慣れていった。それは他人からみれば気の遠くなるような時間だったかもしれない。しかし鈴原は何も言わず僕の行為を見守っていた。それがとても申し訳なく、それでいて素直に『ありがとう』と言えない自分がもどかしかった。

ｆｉｌｅ６：５年ぶりの海（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ７：洞窟のその先へ（前書き）

飼い犬のタロウを失って以来、初めて海に入った貫太郎。少しずつ確かめるように慣れていった。そして、日中泳ぎの練習をしながら、夏の日々が過ぎていった。

ｆｉｌｅ７：洞窟のその先へ

毎日海へと挑むうちに、僕の泳ぎは考えていたよりも早く上達していった。鈴原が言うには塩水では体が浮きやすいのだそうだ。過度な恐怖心も無くなっていた。むしろ海で泳ぐことが楽しみにさえ思えていた。

こうして向かえた帰る日の朝、僕は鈴原に起こされて目を開けた。どうやら夜が明けたばかりらしい。蚊帳から出て縁側に立つとまだ外は肌寒く、昨日庭で茄子の馬を焼いた跡は薄っすらと霧で覆われていた。

「約束した秘密の場所に連れて行ってあげる」

着替えを済ませた僕は、顔を洗う暇さえも許されずに家を出た。早朝の田舎道を急ぎ足で進む鈴原。僕は眠い目を擦って彼女の後に続いた。

「なぁ、何処に行くんだよ」

カブトムシ狩りでもさせてくれるのだろうか。向かう方角は通い慣れた海と違い、森を指していた。しかし、いくら尋ねても鈴原は黙っていた。さらに横へ並ぼうとすると少し足を早めた。表情さえも隠しているようだった。

ほどなくして僕達二人は森の中に入った。そして何重にも覆い茂るヤブを掻き分けた先にそれは存在した。

「この中に入るのか」

ポッカリと口を開けた大きな洞窟を前にして、僕は息を呑んだ。

「ここは昔、防空壕として使われてたんだって」

入り口の端には何やら石像らしきものとお供え物のような置かれていた。線香やロウソクの燃え跡もあった。それらが僕を一層不安にさせた。

「ねぇ」中に入ってから鈴原が提案した。「手を繋がない？」

確かに目が慣れていないせいか、中は薄暗く今にも転んでしまい

そうだった。それに洞窟がどれだけ深いかもわからない。僕は表向き渋々というかたちで了承した。
「突き当りを右に行って、そのあと左。最後に二番目の穴へ入る」
ブツブツと念仏のように唱える鈴原の小声、そして彼女の手の感触がひとりではない証だった。ぼんやりと姿が見えるようになると、だいぶ気分は楽になった。けれど、逸れてしまったときの事を考え、僕は耳に入る言葉を暗記しようと努めた。
複雑であったが、洞窟自体は短かった。そして眩い出口の光に包まれたその末に、ようやく僕らは目的の場所へと辿り着いた。
僕はポツリと呟いた。
「ここが秘密の場所？」
「うん。そうだよ」
綺麗でしょう、という鈴原の問いに僕はうなずいて答えた。

ｆｉｌｅ７：洞窟のその先へ（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ８：秘密の場所（前書き）

朝早く千博に起こされた貫太郎。しばらくついていくと、昔は防空壕にも使われたという洞窟があった。暗闇の中、手をつないで歩いたその先には……

ｆｉｌｅ８：秘密の場所

プライベートビーチと言うべきだろうか。決して広いわけでも、ヤシなど特別な木々が生えているわけでもない。ただ、誰もいない白い砂浜に宝石みたいな青い海が当たり前のように存在した。

僕らは海に入るわけでもなく、並んで座ったまま青い空を眺めていた。はしゃぐことはしなかった。綺麗過ぎて、とてもそんな気になれなかった。ただ眺めているだけで満足に思えた。

「この海ね、若い頃にお父さんがお母さんにプロポーズした所なんだ」

不意にそれまで口数の少なかった鈴原が話し始めた。それから小さな溜め息をひとつ吐き出し、沈んだ気持ちの理由を打ち明けた。

「ずっと一緒にいようって。また一緒にこの砂浜に来ようって約束したんだって」

そう約束したのにな。鈴原は呟いた後口を尖らせて貝殻を放った。

両親の約束は鈴原にとって叶うことがない願い事でもあった。悲しみや葛藤の末にふたりが出した決断は尊重しなければならない。それはわかっていた。しかし、理性だけでは納得しきれないこともあるのだ。

この砂浜は鈴原にとって両親の思い出が詰まった宝物でもあり、また同時に深い傷でもあった。それを教えてもらった自分は彼女のために何ができるのだろう。何をすべきだろうと僕は困った。そしてひとつの考えが頭に浮かんだ。きっと悪くはならない。あとは行動に移せるだけの勇気があるかどうかの問題だった。

僕は意を決して口を開いた。

「また来年、ここに来ようよ」

「えっ？」

「だから、また来年ここへ来ようぜ。二人で」

言葉にしたその後で、僕の鼓動は速くなった。心臓が強く打ちつ

けるたびに焦りが大きくなり、不安が増大していった。
なかなか返ってこない答えに、鈴原の反応が気になった僕は声を絞り出すようにして尋ねた。
「嫌か？」
「ううん。そういう訳じゃないけど」
「じゃあ……また転校するのか？」
「ううん。お父さんはきっともう引っ越ししないって。違うの」
おもむろに立ち上がり、顔を隠すようにして鈴原は何歩か前に出た。僕からの位置では日焼けした腕で涙を拭っているように見えた。
もしかしたら余計に傷付けてしまったのではないか、と動揺した僕を安心させるように、鈴原は笑みを浮かべて振り返った。
「やっぱり、石井に教えてよかった」
このときのことは今でも忘れない。青い空に白い砂浜、確かに秘密の海は美しかった。しかし、それを上まわるほど鈴原の笑顔は貴重に思えた。とても輝いて見えたのだ。
「そうだ！　忘れてた」
太陽を直視できないのと同様に、純粋な感情に対する免疫が備わっていなかった。なんとかしようと、僕は話題を逸らした。
「いつだったか、ノートに描いた猫の絵。あれにヒゲを付け足してくれよ」
なんだか気になっちゃってさ、と言った僕に鈴原はシッシッシッと笑った。涙が出てしまいそうなほど胸が一杯で、それを隠そうと僕も無理に笑顔をつくってみた。この瞬間が幸せなのだと感じた。それは振り返ってみても間違い、確かなものだった。

ｆｉｌｅ８：秘密の場所（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ９：夏の終わり（前書き）

秘密の場所とは人のいない小さな砂浜だった。千博は自分の父親と母親がこの場所で約束を交わしたのだと話した。それを聞き、意を決して口を開いた貫太郎。そして二人はまたここへ来ようと自分達の約束を交わしたのだった。

file9：夏の終わり

夕方。大きな駅で乗り換えて、僕らは見慣れた電車で家路についていた。

帰宅途中のサラリーマンに混じって大きなリュックサックを背負ったふたり。海の香りというか、他から浮いてしまうようほどの雰囲気が僕らにはあったと思う。長い旅の末に染み付いたものかもしれない。

僕らの間には苦楽を共にした連帯感が生まれていた。それは普段遊んでいる男友達よりも強かった。それでも降りる駅が近づくと交わす会話が段々と少なくなり、無口になってしまった。帰りの電車の中で、近づいた距離を遠ざける作業に取りかからなければならないことを知っていたのだ。

市営プールがある隣の駅を発車したところで、鈴原は囁くように尋ねた。

「海に行ったこと、秘密にする？」

はたしてそれが可能なのか僕にはわからなかった。これほど日に焼けた人間がきっとクラスにはいないからだ。褐色の肌をしたふたりが並んで座れば、疑われても不思議はないと思った。

僕は言った。

「そうだな。鈴原がそうしたいなら黙っていようか」

「石井はしたくないの？」

切り替えされて僕は黙った。

確かに秘密になどしたくなかった。何よりも大切な思い出を触れてはいけない恥ずかしい事のように扱わなければならないのが残念な気がした。それでも夏の日差しを受けて向日葵のように、大きく育った感情を二学期へ向けてクラスに入る大きさまで縮めなければならない。六年目の集団生活は僕には足枷のように思えた。

電車がホームへと止まる直前、寂しさの残る笑顔で鈴原は言った。

「今度は自転車、石井が教えてよね」
僕は友人のお父さんを見つけたため、黙ってうなずくことしか出来なかった。そして駅を出た後は挨拶も交わさずに別れてしまった。これでいいのかと自問自答しながら、しかしながら今は旅の余韻に浸りたいもうひとり自分もいた。
こうして長かった夏休みは終わりを迎えた。

ｆｉｌｅ９：夏の終わり（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１０：病み上がりの教室（前書き）

夏の水泳の特訓が終わり、海から帰ったふたり。電車内での会話は弾まない。それでも、これから訪れる秋が実りあるものだと貫太郎は期待せずにはいられなかった。

ｆｉｌｅ１０：病み上がりの教室

夏休みが終わり、最初の水泳の授業がやって来た。この日は検定だった。

かつて毛伸び十メートルの壁にぶつかっていた僕だったが、もはやカナヅチではなくなっていた。バタ足にクロール、平泳ぎと褐色の肌をしたイルカのようにプールの中を縦横無尽に泳いだ。

ある生徒は『なんだ石井、泳げるじゃん』と素直に驚き、級を追い抜かれたひとりは悔しさから閉口した。僕は飛び級に飛び級を重ね、黒星一つにまで上ってしまった。当然、僕を『カナヅチカンナ太郎』と呼んでからかう人間はいなくなった。

この日、鈴原の姿はプールになかった。風邪をこじらせて始業式から学校を欠席していたのだ。僕の練習に付き合っていたこともあり、彼女はまだ目標である一級をとってはいなかった。それでも水泳の授業が終わる九月の第四週まで検定はあと二回残っていた。別に焦る必要はなかった。

ノートに落書きされた猫もヒゲがないままだった。今度、会ったら付け足してもらおうと考えていた。さらに検定での活躍を自慢げに話すつもりだった。そして何よりもお礼の言葉を伝えようと思っていた。

もう少し早く素直になれていたら、そんな後悔をしなければならないとは考えもよらなかった。

鈴原と入れ替わりで風邪をひき、僕が学校を休んでいた月曜日。その事件は起こった。

翌日、喉の痛みを不快に感じながら登校した僕は早速いつもと様

子がおかしいことに気付かされた。遅刻寸前で教室に滑り込んだこちらへクラスの全員が一斉に視線を向けてきたのだ。瞬間、教室の中がシンと静まり返っていた。

「お、おはよう」僕は緊張して言った

誰か他の人間を意識していたのだろうか。違うとわかると、すぐにまた男子の群れも女子の群れも各々会話を再開した。幾人かは面倒臭そうに挨拶を返してきた。

普段は騒いで教室内を走り回っている佐渡学と池沼健二のふたりがこの日に限っては何やら小声で話し合っていた。また喧嘩をして互いに無視を決めたはずの青木玲子と生田奈菜も雪解け兆しが訪れていた。それだけではない。みんな全体的にどこかソワソワとして落ち着きがなく、それでいて妙な連帯感があった。とても不自然だった。

怪訝に思いながら席についた僕はその日も隣を確認した。ランドセルは無かった。二学期が始まり、鈴原に会っていない状態が一週間も続いていた。風邪が長引いているのだろうか。このとき、何も知らない僕はそう心配した。

「鈴原の奴、また今日もサボりかよ」

僕はそれとなく学級委員の鮎川に話しかけた。容態を尋ねるとき、あえて悪く言ったのは茶化されない為の予防線だった。友人をけなされて怒るだろうか。それともこちらの意図を見透かしてからかってくるだろうか。

しかし、鮎川の口から発せられたのは少し意外な言葉だった。

「うん……えーと、昨日は来たんだけど」

反応が明らかに普段と違っていた。『鈴原』という名前を耳にした途端、驚いた様子でビクリと固まり、それからこちらをチラチラと確認してきた。僕の心に小さな不安が芽生えた。

ｆｉｌｅ１０：病み上がりの教室（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file11：転校か？（前書き）

水泳の特訓を終えた貫太郎はもはや以前の姿ではなかった。魚のように泳ぎまわり、検定は飛び級、大成功に終わった。しかし、貫太郎の心には不安が芽生えていた。千博がどういうわけなのか2学期の教室にいないのだ。

ｆｉｌｅ１１：転校か？

風邪だと聞いていたが、鈴原の病は僕が思うよりも重いものだったのだろうか。しかし鮎川は昨日、学校に来たと言っていた。それに何かがあれば、お見舞いなどの件で連絡網でまわってくるはずだ。ならば何なのだろう。

「転校……か？」僕はポツリと呟いた。

父親の急な転勤で引っ越しを余儀なくされたのだろうか。それならば、説明がついてしまう。お別れ会もクラス全員のメッセージで埋める色紙もなく、ただ挨拶だけをして鈴原この学校を去っていったのではないか。彼女の休んだ一週間という長さが急な荷造りを終わらせる頃合と重なっていたように思えた。

まだ自転車の乗り方を教えていない。それに検定でのことも、お礼の言葉も伝えていない。約束だって交わしている。来年またあの秘密の海へと行かなければならない。これからやるべきことは沢山あるのだ。

色々と考えているうちに、はじめ小さかった不安は風船のように大きく膨らみ、静かに伸しかかってきた。何とかはっきりさせたいと思い、僕は椅子を動かして鈴原の机の中をちょっとだけ覗いた。

道具箱があった。さらに教室後ろの棚には絵具セットも置かれていた。体育館で使う洗いたての上履きも見つけられた。

どうやら隣の席の住人はいなくなったわけではないらしい。取り越し苦労だったと、僕は安心した。考えてみると、クラスの様子がおかしいことと鈴原が休んでいることのつながりは鮎川の歯切れの悪い返答以外何も無いのだ。早とちりが過ぎたと反省した。

先生が教室に入ってきたので、僕は急いで自分の席へと戻った。

起立、気を付け、礼。そしておはようございます。いつもと変わらない動作が行なわれた後、出欠をとる前に先生は生徒全員の顔をまんべんなく撫でるように眺めた。その深刻さを含んだ表情を見て、

やはり何かが起きたのだと僕は察した。おそらく昨日、このクラスに何かがあったのだ。

「鈴原さんのことですが」

先生はそう始めて、やはり適していないと思ったのかあらためて言い直した。

「昨日の事故の件ですが、他のクラスの生徒や誰かに話す事を禁じます。決して喋ったり、またからかったりしてはいけません」

「先生」もうひとりの学級委員である榎本隆志が手を挙げた。「それは昨日も聞きました」

「それはもちろん知っています。ですが絶対に守って欲しいから言うのです」

小学六年生の女子にとっては大変デリケートな問題ですから。先生は約束を破った者には校庭十周のランニングと反省文三十枚という鬼のような罰則を告げたが、具体的な事件の内容は全く話さなかった。

教室を出て行ったあと、昨日休んだ僕以外の生徒達は互いに周囲の仲間と顔を見合わせていた。ヒソヒソ話を始める女子や男子のグループも現れた。しかし先生のカミナリが怖いのか、表立って声高に口にする者は一人もいなかった。

やはり鈴原が関係しているらしい。いったいアイツの身に何が起きたのだろうか。僕には内緒話に参加して真相を知りたい反面、再燃した不安をこれ以上確かなものにしたくないという感情も生まれていた。

「昨日、鈴原に何かあったのか？」

規則を遵守させる立場だからか、それとも口にできない他の理由があるからか。とりあえず鮎川に尋ねてみたが、答えはいっこうに聞けなかった。

僕が事件の概要を手にしたのは昼休みの事で、情報の提供者は隣のクラスにいた早川進からだった。

罰則を定められていない友人に怖いものはなかった。僕に対し、

興奮した口調で面白おかしく自分が聞いた内容の全てを話した。いずれは伝わる事だからだろうか。学級委員の鮎川は何も言わず、曇った表情でジッとこちらを見つめていた。

ｆｉｌｅ１１：転校か？（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file12：真相（前書き）

２学期になってから顔を合わせていないふたり。貫太郎は先生の言葉やクラスの雰囲気から、千博に何かが起きたとを感じた。転校してしまうのか、それとも……。隣のクラスからやってきた友人の口から、その理由が明かされる。

file12：真相

あらましはこうだった。事件の起きた日、天気予報では晴れのはずだったが、実際には曇りだった。土日の雨を引きずり気温がそれほど高くなかったため、そこで水泳の授業は中止になった。五，六時間目に運動会の全体練習があったため、三時間目は空いている体育館でクラス対抗のバスケット大会となり、四時間目は体育着のまま教室で国語の授業と変更になったのだ。しかし、それらの情報は三時間目の終わりに学校へとやって来た病み上がりの鈴原には伝わっていなかった。

見上げた根性というべきか、鈴原は本調子でないにもかかわらず水泳の検定を受けるつもりでいたらしい。皆の平服しか置かれていない誰もいない教室で水着に着替え始めていた。

普段、着替えるときは男子が先で女子が後という順番の決まりができていた。それは水泳のときも同じだった。更衣室を設けなかったこと、そして当日の変更が不幸な事故の原因だった。

クラスの生徒全員が教室へと戻る。その足音が聞こえたとき、鈴原はちょうど全裸の状態だった。

とても間に合わない。慌てた鈴原はとっさに教室隅の掃除用ロッカーへと駆け込んだ。そこで息を潜め、四時間目の授業と給食、昼休みを乗り切ろうとしたのだ。五時間目の全体練習になればクラスの全員が外へ出る。しかし、それは淡い期待であり、決して上手くいかないことは明白だった。

最後の砦が暴かれたのは四時間目も半ばに指しかかった頃だった。微かな物音を聞き逃さなかった数人のクラスメイトによって授業は中断された。みんなの注目する中、ロッカーの扉は開けられたらしい。

それからの話はよく憶えていない。耳に入れたはずだが、まるで笊だった。気がつくと六時間目の授業が終わっていて、友人の姿は

何処にもなかった。自分の顔から血の気がひき、青くなっているのがわかった。

千博の前では知らないフリをしてよね。掃除のとき、他の誰にも聞こえないように注意した鮎川の言葉が頭から離れなかった。もちろん言えるはずがなかった。それどころか次に会うとき、いったいどんな顔をしていれば良いのか僕にはわからなかった。

僕はそのまま家に帰ることをためらい、学校近くの公園へと足を運んだ。ブランコもなければ滑り台も砂場もない。しかし、休日になると犬の散歩だけでなくサッカーや野球の練習などにも利用されている町で一番の広さをもつ芝生があった。

駆け出し、豪快に転んで仰向けに空を見上げた。しかし、そこに晴れた青空はなく、代わりに複雑な雲の重なりがあった。綺麗ではあったが、まるで自分の心を投影しているように思えた。

手の甲に触れた草の葉はひんやりと冷たく、秋の訪れを実感させられた。あの眩しかった夏は終わったのだ。

そのとき、いつの間にか張り詰めていた緊張が解け、僕の目から涙がこぼれた。

他愛もない口喧嘩をした後の鈴原。ノートに落書きを描いた鈴原。そしてあの秘密の砂浜で輝くような笑顔を見せた鈴原。彼女と出会ってから二年間、その記憶の断片が走馬灯のように浮かんでは消えていった。

自分が恥ずかしい思いをしたわけではない。それなのに食欲が湧かず、壁掛け時計の音を聞く他に何もする気になれなかった。深く息を吸うたびに胸の奥がズキズキと疼き、そして陰鬱な気分が倍加した。僕は自分の部屋で布団に顔を埋め、時折り弱い溜め息を吐いた。

全ては運が悪かったのだ。不用意だった鈴原に対する憤りが芽生

えるたび、傲慢な僕は必死に掻き集めて他へと転嫁した。
自分もあの場所にいたら、という考えが湧き上がるたび、そんな卑しさを責めた。男子全員の記憶を奪い去りたいと思った。心が沈み、後悔に打ちひしがれた。
少し余裕が出てくると、鈴原はこれよりも辛い思いをしているのだろうか、などと考えたりもした。同性である女子は数えずとも、僕を除いたクラスの男子全員が鈴原の裸を見たのだ。どんな状態であったのか現場に居合わせなかった自分にはわからないが、それでも彼女の受けた心の痛みは察するに余りあった。他人であるはずの僕ですら苦しかったのだから。

ｆｉｌｅ１２：真相（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１３：国語の教科書（前書き）

千博が欠席しているのは転校するのではなく、貫太郎を除くクラスメイト全員の目の前で恥をかいたからだった。それを知り、貫太郎は苦しんだ。

file13：国語の教科書

二ヶ月が経ち、町はすっかり深緑から紅葉の季節へと変わっていた。学校では運動会も秋の遠足も終わり、僕達六年はアルバムの写真撮影や文集作りなど卒業に向けての活動が多くなった。色付いた枝の葉が地面へと落ちるたびに冬の足音が聞こえてくる気がした。

教室にも大きな変化があった。担任が病気療養という理由で休職したのだ。代わりとして教壇に立ったのは後藤田という二十代後半の若い男の先生だった。叱るときも遊ぶときも豪快なその熱血ぶりに、九月以降荒れ気味だったクラスはようやく落ち着きを取り戻した。

しかし猫にはまだヒゲがないままだった。そろそろノートのページも少なくなり、新しい一冊を買わなければならなくなっていた。僕は不細工なそれを目にすると、決まって七月の終わりから見ていない空の席が気になってしまった。あの日以来、鈴原は教室へ現れていなかった。

猫のヒゲだけではない。検定の報告だってしていない。約束の自転車も教えられないままだった。八月の電車で別れてから、僕の心の時間は止まってしまったようだった。今更ながら、鈴原の大きさに気付かされた。

「机をよろしくね」

ぼんやり隣の机を眺めていた僕に鮎川は声をかけた。最近、彼女は毎日のように給食を持って教室を出ていた。はじめは学級委員の仕事なのだろうと思っていたが、相方である榎本隆志は残っていた。そんなとき、気になる噂が僕の耳に入ってきた。

友人である早川進の話によると三時間目のことらしい。体育で怪我をした生徒が治療に向かったところ、保健室前の廊下で鈴原の姿を見たというのだ。当然その情報はすでに学年中へと広まっていて、日常に埋没しかかっていた九月の事件が再び顔を出してしまった。

給食が終わった昼休み、早速その影響が現れた。
『鈴原ゲーム』というらしい。ロッカーの扉を開けると、中にいる人間が「いやん」というだけのルールもない単純な遊び。ゲームというよりからかいの要素が強かった。
面白がっている数名の男子を遠巻きに女子が睨んでいた。もうひとりの学級委員である榎本隆志も一応注意しようか悩んでいるようだった。しかし、遊んでいる中にクラスでもガキ大将的な存在がいたからだろうか、誰も止めようとする気配はなかった。
その先を知らない当時の僕にとって、異性の裸はある意味で終着点であり、特別な存在だった。そんな心のどこかで欲していた、独占したいと思っていた大切なモノを自分以外の男子全員が手にしてしまった。そして僕だけが、唯一得ることができなかったのだ。
こんな奴らが。僕は腸が煮えくり返りそうになり、奥歯を噛みしめた。変声期を迎えたガラガラと聞こえる笑いがとても不愉快だった。彼らの悪ふざけを許す教室の空気も嫌だった。そして何よりも鈴原が侮辱されていることが堪えられなかった。悔しくてたまらなかった。
気が付くと、僕はクラスで一番背が高く腕力もある西村のアゴを殴り、そしてすかさず彼の首を両手で掴んでいた。
「テメェ！」西村が吠えた。
ロッカーの扉に押し付けられ、急のことで驚いていたガキ大将もすぐに態勢を整えて僕を引き剥がそうとしてきた。しかし、僕は親指を立てて首筋にめり込ませた。それから彼が何かをしようとすると絞めて、動きを封じた。
喧嘩をしているとは思えないほど音のない時間が過ぎていった。教室中が静まり返っていた。聞こえるのは興奮した僕の息づかいだけだった。
まだ殴られてもいないのに、僕の目は涙で一杯になっていた。それに気付いたのか激昂していた西村の表情にも困惑の色が見え始めていた。

喧嘩を止めさせたのは新しい担任だった。後藤田先生は力で引き剥がすと、有無をも言わさず僕らの頭に一発ずつゲンコツを落とした。そして学級委員の榎本も呼びつけ、職員室へと連行した。

僕自身は何も言わなかったが、喧嘩が起きた前後の事情は学級委員の口から伝えられた。西村は急に殴られたという主張だけを繰り返していた。結局、いくらか注意された後、攻撃を仕掛けたはずのこちらが先に職員室を後にした。

教室に戻り自分の席につくとき、帰っていた鮎川と視線が合った。他の誰かから話を聞いたのだろうか。驚いたような、それでいて心配そうな顔をしていた。僕はなんだか気まずくて普段は絶対に読まない国語の教科書を開いた。

ｆｉｌｅ１３：国語の教科書（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１４：久しぶり（前書き）

あの事件から２ヶ月が経ち、すっかり秋になっていた。そんなある日の教室、男子生徒の数人が千尋のことをネタにしてふざけた。頭にきて、不慣れな喧嘩をしてしまった貫太郎。しかし、新しい担任の後藤田は話を聞いた後、責めることはしなかった。

file14：久しぶり

昼休みの喧嘩以降、教室で鈴原の名を口にする生徒はいなくなった。先生からどんな魔法の言葉をかけられたのか。西村も僕に対して突っかかってくることはなかった。

こうして一週間以上が過ぎたある日、僕は職員室に呼び出されて先生から頼まれごとをした。

休んだ鮎川の代わりとのことだった。自分の給食を持って会議室へと行けと言われた。そこで昼食をとれば良いということだった。

卒業アルバムの製作だろうか。それとも文集の編集作業だろうか。僕は面倒に感じながら会議室の重いドアをゆっくりと開けた。

すると……

「典子、やっぱり石井には……あっ！」

そこにいたのは紛れもなく鈴原千博だった。数ヶ月ぶりに見た姿、待っていた顔が目の前にあった。小学六年生にしては早熟の彼女はしばらく見ないうちに、また少し大人の女性に近づいているようだった。

何かを言いかけていた鈴原は目を丸くして固まり、それから視線を逸らすように俯いてしまった。

僕は驚きと高鳴る鼓動を隠し、冷静を装って話しかけた。

「やあ、久しぶりだな」

先生がここで食事しろって。近くのテーブルに給食を置き、聞かれる前に付け加えた。それがいけないきっかけだったのかもしれない。鈴原は出口へと走った。

このままではいけない、今を逃してしまったら、もう二度と会えないかもしれない。すれ違った瞬間、僕はとっさにそう感じた。そして思考よりも体が先に反応して鈴原の腕を掴んでいた。

「待てよ」僕は消え入りそうな声で言った。

廊下に飛び出しているはずの自分の体が実際はドアまで届いてい

ない。驚いた鈴原はその原因を知り、振り解こうとした。
「は、放して！」
バチン。乾いた音が会議室に響いた。空いていた鈴原のもう一方の手が僕の頬を叩いたのだ。
力のこもった遠慮のない平手だった。一瞬、花火が飛んだように見えているものが明るくはじけた。そして痺れるような痛みが遅れて現れた。
「ごめ……大丈夫？」
ヒザをつき、うずくまった耳に鈴原の声が入った。しかし、僕は何も答えられなかった。殴られたショックからだろうか。感情に敏感だった体が今度は全く動かなかったのだ。無論真っ白になった頭では気の利いた台詞はおろか、『痛い』のひと言すら思いつくことは出来なかった。
口論が発展して頬を叩かれたことはそれまでに何度もあった。引っ掻かれたとことも、ツネられたことだってある。しかし、この日はそれまでと違う気がした。意識していたからかもしれない。とっさの平手に女性的な片鱗を感じたのだ。
しばらくして顔を上げたが、そこに鈴原の姿はなかった。ジンジンとした頬の刺激はすぐにひき、長く残っていたのは意外にも長袖を掴んだ指先の感触だった。彼女が去った会議室の中は妙に寂しく感じられた。まるで夏の花火のようだった。儚くも消えてしまった一瞬の遭遇。それは僕にとって何とも言えない思い出の一ページとなってしまった。

ｆｉｌｅ１４：久しぶり（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１５：女の子の部屋（前書き）

給食の時間、担任の後藤田に言われて会議室へ入った貫太郎はそこで千博と鉢合わせた。とりあえず挨拶をしたが、二ヶ月の間にふたりには大きな隔たりが出来ていた。逃げようとする千博の腕をとっさにつかみ、貫太郎は殴られてしまった。

file15：女の子の部屋

翌朝、登校した僕は鮎川から溜め息まじりの責めを受けた。鈴原が休むと言い出したのだ。原因は昨日の出来事だろう。それは容易に想像がついた。

傍から見ればいつも口喧嘩ばかりしていたふたり。しかし僕は鈴原千博が憎いわけではなかった。むしろ理不尽でつまらない拷問のような学校生活の中にあって、それでも笑顔を与えてくれた彼女は特別な存在だった。だからこの二ヶ月間は退屈だった。戻ってきて欲しい気持ちは誰にも負けない気がしていた。

もっとも西村との衝突以来、そんなことはクラスの誰もがわかっていたと思う。だからこそ鮎川は少々の小言で僕を許したのだ。僕の気持ちは誇張され、装飾されて教室の壁を越えた広く学年中へと知れ渡っていた。

放課後になり、鮎川から家に来ないかと誘われた。どうやら鈴原の件で話したいことがあるらしい。特に断わる理由が見つからなかった。あえてあげれば、女子の家だからということくらいだろうか。どちらにせよ、僕は首を縦に振ること以外、考えていなかった。

大きな公園を越え、線路を越えたその先に学級委員である鮎川典子の家はあった。

豪邸と言ってよい。庭にはダルメシアンが放し飼いにされていて、スプリンクラーが芝生に潤いを与えていた。玄関に入ると目の前に吹き抜けのホールがあった。まるで映画やドラマに出てくるセットのようだった。たびたび鈴原の話で耳にしていたが、僕の想像を上まわるほど彼女の屋敷は立派だった。

これが同じ学校生活を送っているクラスメイトの住処なのかと思うと気が遠くなりそうだった。明らかに別世界、別次元だった。僕の家には額に入った絵画など掛けられてはいないし、時計だって単三電池で動く一般的なものである。多分どれも高いのだろう。風で

揺れるレースのカーテンですら、お上品に映ってしまった。
鮎川の部屋へと通された僕だったが、そこで衝撃は終わらなかった。出されたオレンジジュースに目が点になってしまった。ストローがついていたのだ。
それにしても女の子というのはこんなにも小奇麗にしているものなのか。高価そうなクッキーを口に入れ、慣れないアイテムでジュースをすすりながら僕はそう思った。室内のあちらこちらに軟らかなクッションがあり、もったりとした甘い匂いが充満している。色彩も雰囲気も自分の部屋とは全く異なっていた。
顔に出ていたのか。鮎川は内心落ち着かない僕に尋ねた。
「女の子の部屋は初めて？」
「いや……どうだったかな」
はぐらかしながら、鈴原の実家へ行ったことは回数に入るのだろうか、と僕は悩んでいだ。
もっとも、あの家屋にはここにあるような物はまるでなかった。それと正月と夏休みの年に二度しか帰らないらしい。では、父親と二人暮しをしている今の住処はどうなのだろう。やはりこの部屋と同じなのだろうか。
「千博のトコはあると思ってたけど」
ドキン、と僕の心臓が大きく脈打った。動作で隠そうとジュースを飲もうとしたが、ストローがなかなか口に収まらなかった。焦っていることはよほどの鈍感でないかぎり伝わってしまったと思う。
本題に入るけど。僕の様子を確かめてから、鮎川はそう言って咳払いをひとつした。

ｆｉｌｅ１５：女の子の部屋（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１６：親友（前書き）

千博にビンタをもらった翌日、貫太郎は招かれて鮎川の家にやってきた。男友達とは違う彼女の部屋は初めて体験する世界だった。そんな空間に慣れる間も与えず、鮎川は話の本題に入った。

file16：親友

「石井は千博のことをどう思っているの？」
「それは」
もちろん酸いも甘いもかみ分けた大人の男へとなるまでにはあと何十年も磨きをかけなければならないだろう。しかし、小学六年生の僕であっても、このときの鮎川の意図には察しがついた。彼女はただの友達としての評価を聞いているわけではない。もっと大事な大切な質問をしているのだ。
「それは別に……まあ、確かに隣にいないと、ちょっとは寂しいかな」
けれど、わかっている事とそれに対処できる事との間には数十年の開きがあることを僕は知った。恥ずかしくて素直になれなかった。それに本人にすら伝えていない、自分の中でまとめきれてすらいない気持ちをどうして第三者の鮎川へ聞かせなければならないのかという猜疑心もあった。学級委員には何でも知る権利があるというのだろうか。
「ただ、そう考えているだけなら、千博のことは放っておいてくれない」
答えに不満だったのだろう。鮎川は溜め息の後、少し低いトーンで、それでいて芯をもたせた声色で言った。
「意味がよくわからない」
「具体的に言うと、後藤田から頼まれても断わって欲しいのよ。千博と一緒に給食をとることとか、迎えに行くこととか」
担任の名前を呼び捨てにした鮎川に僕は驚かされた。学級委員の暴言。それは友人の為に尽くす学校では決して見せない彼女の一面だった。
僕は唇を尖らせ、口ごもりながら反発した。
「そ、そんなのお前から言えよ。学級委員だろ」

昨日の強烈なビンタが僕の脳裏をかすめた。いったいあの後、鈴原はどのような時間を過ごしたのだろう。やはり辛い思いをさせてしまったのだろうか。自分では傷付けてしまうだけなのだろうか。

鮎川の批難に近い言葉を耳に流し入れている間、僕は色々と頭の中で考えていた。

一方的な会話が途切れたとき、僕はボソッと呟くように言った。

「アイツと、鈴原と約束したんだ」

「約束って？」

「それは、ふたりだけの秘密だから言えない。だけど」

自分だけが先に叶えてもらい、未だに鈴原の望みは達せられていない。約束を果せていないのだと、僕は落ち着いた口調で話した。

「何か考えがあるんだろ？　教えてくれよ」

役に立てることがあるなら遠慮なく言ってくれ。説明不足とわかりながらも、代わりに出来る限りの気持ちを込めた。

僕は相手の言葉を待った。

しばらくして学級委員はランドセルからノートと数枚のプリントを出して言った。

「今日は急な用事ができたから、代わりにこれを鈴原さんのところまで届けて下さい」

いつも耳にする鮎川の真面目ぶった口調に僕はうなずいて答えた。

ｆｉｌｅ１６：親友（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１７：哀願するように（前書き）

鮎川から千博との仲を聞かれ、戸惑い、煮え切らない返答をする貫太郎。しかし、それではいけないと思い直し、出来る限りの言葉で助力を求めた。こうして貫太郎は親友であり学級委員である鮎川の代わりに、ノートとプリントを千博のもとへ届けることになった。

ｆｉｌｅ１７：哀願するように

鮎川は自宅ではなく、別の場所で待ち合わせの約束をしていたらしい。おそらくはこうなる展開を想定してわざわざ仕掛けていたのだろう。夕暮れの図書館はひと気が少なく、駐輪場の自転車の数も疎らだった。

館内は暖房が効いていて、大量に保管されている匂いが鼻を刺激した。まさしくここは図書館である。学校の図書室すら足を踏み入れる事のない僕にとって、ここは未知の空間だった。

一階は本棚だけだった。二階に上がると、そこには自習用のテーブルが並べられてあり、部屋の隅には勉強机なども置かれていた。新聞を読む中年の男性、分厚い本の内容をノートに書き写す女子大生。僕はその中から見慣れているはずの顔を探した。

いた！　鈴原だ！

眼鏡をかける鈴原を見たのは初めてだった。彼女は計算ドリルをしているようで、集中しているのかこちらには気付いていないようだった。

見つけた瞬間、僕の視界は明るく鮮明になり、心臓が強く打ち付けた。そしてそれまで感じたことのなかったふわふわとした紅葉感が急速に全身を支配した。初めての感覚だった。

僕はためらった。恐怖心だったのかもしれない。数ヶ月前まで普通に話していた女の子が今やこんなにも大きな存在となっていた。そのことをはっきりと認識させられたのだ。同時に失敗は大きな傷を生むことは未熟な頭で考えても明らかだった。

このまま話さず家へと帰りたい。そう思ったが、しかし自分の希望とは別に渡さなければいけない物があった。鮎川から預かったノートとプリントだ。足枷のように感じたそれらは自分が望んで得た本日限り有効の通行手形なのだ。

そそくさと退散しては次の日鮎川に会わせる顔がない。葛藤の末、

弱気を押さえつけた。今がその時だと感じた。やる気が負けてしまうその前に実行してしまおうと、鼻息も荒く、勢いに任せて僕は歩き出した。

早足のため、考える暇がなかった。何をするべきかわからず、またどんな言葉をかけて良いのかもわからなかった。あっという間に彼女の目の前に着いてしまい、僕は棒立ちになってしまった。

音を立てずに吸った鼻から、鈴原の愛用していた消しゴムの甘い匂いを感じた。人工的な苺の匂い。これの他にバナナもまたお気に入りだった。

「どうして」それが鈴原の第一声だった。

ページを捲るときに、足が視野に入ったのだろう。あらためて僕の顔を確認した鈴原は目を丸くしていた。

僕は手に握っていたノート類を差し出して言った。

「これ、鮎川から……渡せって」

預かり物は音がするほど勢いよく僕の手から離れた。当然だが、お礼の言葉もなかった。鈴原は慌てた様子で奪い取ったノートと机上に広げていたドリルなどを鞄の中へしまい、急いで席を立とうとした。

僕はとっさにトレーナーの袖を掴んだ。

「放して！」鈴原が声をあげた。

瞬間、まずいと感じた。前回叩かれたパターンと同じなのだ。見ると、自由の利く方の腕はすでに高々と振り上げられていた。僕は身を屈め、ギュッと強く目をつぶった。

弾けるような衝撃の後に訪れるジンジンとした頬の痛み。しかし、それらはやってこなかった。恐る恐るまぶたを開けると、赤い顔をした鈴原が困惑した表情でジッとこちらを見つめていた。

哀願するように、僕は言った。

「なあ、せっかくなんだから話さないか。俺、お前と話したいこと沢山あるんだ」

結構情けない格好だったかもしれない。しかし、これが精一杯だ

った。後はただジッと返事を待つことしか出来なかった。
しばらくして鈴原の答えがあった。
「わかった。だから」
服が伸びちゃうと言われて、ようやく僕は腕を掴んだままであることに気が付いた。叩かれそうになっても放さなかったらしい。解いた指先には長袖の感触が残っていた。

ｆｉｌｅ１７：哀願するように（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ１８：夕暮れの告白（前書き）

鮎川からノートとプリントを受け取り、図書館へとやってきた貫太郎。少し探してメガネをかけて勉強する千博を見つけた。帰ろうとする彼女を引き止め、何とかお願いして会話の時間をもらうことができた。

file18：夕暮れの告白

夕暮れの公園。僕らは遊ぶわけでもなく、ブランコに腰かけていた。

勉強用の眼鏡を外したからといって、内面も元通りとなるわけではない。久しぶりに訪れたふたりだけの会話はぎこちないものだった。僕だけがやたらと多弁になり、向かい合う鈴原は黙ったまま話を聞いていた。

「そういえば、昨日会議室へ入ったとき、俺の名前を言ってたように聞こえたけど」

「ううん。言ってない」

「……そうか」

変わってしまった彼女を元へ戻そうと努力してもかなわないことがもどかしく、また少し寂しくもあった。

時折り相づちすらまともに返ってこないこともあった。いくら言葉のキャッチボールを試みても、ことごとく失敗に終わった。僕は滑稽なほど自分が空回りしているように感じた。それでも会話が途切れることを恐れて話し続けた。

運動会のこと、新しい担任のこと、そして昨日見たバラエティ番組のこと。触れなかった話題は鈴原が受けられなかった検定の話や不登校に関わることだった。特にあの日の出来事は禁句だと肝に銘じ、一切口に出さなかった。

面白くなかったのか。それとも居心地が悪いのか。こっちが気を遣い、懸命になっているのに、鈴原はまるで上の空だった。退屈そうにも見える憂鬱そうな仕草が僕の心をいらつかせた。

とるに足らない笑い話が途切れたとき、意を決して僕は尋ねた。

「つまらないか。俺の話」

すると予想に反して、鈴原から否定以外の答えが返ってきた。

「だって石井、腫れ物を扱うみたいなんだもん」

本当なら不登校になった原因を何よりも先に聞くはずだ。そんな鈴原の指摘に言葉が見つからず、今度は僕が黙ってしまった。
少しブランコを揺らしながら、鈴原は話を進めた。
「知ってるんでしょ？　あの日のこと」
「えっ、ああ……早川から聞いた」
やっぱりそうなんだ。うつむき、溜め息をひとつ。その後で暗くなった空を仰ぎ、鈴原は微かに笑って見せた。
「差が大きくなっちゃった。もう偉そうに威張れないよね」
弱点がまた一つ増えてしまった自分と僕とを見比べて、鈴原は少し寂しそうに笑った。
「そんなことない」僕は首を振った。「まだ牛乳だって飲めてないし、それに勉強だってお前より悪いぞ。ボールだってあんまり遠くまで投げられないし、足だってお前のほうが速いじゃない……か」
自慢ならない力説は情けなさから尻つぼみになった。それでも鈴原は「どれもたいしたことじゃないよ」と言って納得しなかった。確かに彼女の身に起きた災難に比べれば、どれも些細な事だった。僕は焦った。
「そうだ、自転車！」
「えっ？」
「自転車に乗る練習、約束だったろ？」
自分が泳げるようになったいま、今度は鈴原が自転車に乗れるようにならなければならない。それが条件だった。
「うん。でも……いいよ」
「え？」
「もう約束は忘れて」
そういう訳にはいかないと食い下がったが、鈴原の意思は頑として変わらなかった。
僕は感じてしまった。おそらく鈴原が断ち切りたいのは決して裸を見た男子だけではない。噂を耳にした人間や、さらには九月に入るまでの学校生活も遠ざけたい対象なのだ。

ふたりで交わした約束さえそうなのだ。幸せに思えたあの夏の出来事も、共に過ごした二年間もきっと忘れたい過去なのかもしれない。鈴原にとって、もはや自分が消えて欲しい人間のひとりなのだ。そう思うと何だか無性に悲しかった。

「寒くなってきたから、もう帰るね」

鈴原はそう言って、ブランコから立った。

直感というのだろうか。漠然とこのまま二度と会えないような気がした。遠退いていく後姿がやけに儚く映ったのだ。妙なことに、ボーイッシュな短い髪とジーンズも今日に限って、とても女の子らしく思えた。

どうしてもっと素直に、上手く言えなかったのだろう。これっきりなら、これが最後の機会なら本当に伝えたいことは他にあったのに。もう一度チャンスをくれないだろうか。そしたら今度こそ、絶対に今度こそは。

失いそうになってはじめて思い知らされた。もう嘘ですり抜けるような態度ではいけない。真実と弱さ。後悔の気持ちが強まるにつれ、臆病な僕の心は大きく揺り動かされた。

「鈴原！」僕は声を張り上げた。

呼び止めた声は若干調子が外れていた。でも大丈夫だと心の中で言い聞かせた。つまらない見栄や嘘で飾らない限り、言葉はちゃんと伝わるはずなのだ。

僕は足を止めて向き直った鈴原の顔を睨みつけるように見た。

「恥ずかしいからずっと言わないつもりでいたけど、俺の一番の弱点を教えてやる」

目を合わせ続けることが出来なかった。それでもなけなしの根性が臆病風を抑えつけ、かろうじて首の皮一枚でつながっていた。声を張らなくても良いところまで距離を縮めた僕はうつむき、拳を力一杯握り締めたまま祈った。

「いいよ、いまさら弱点なんて。私、別にそんな――」

「お前のいなかったこの二ヶ月間。毎日が退屈でつまらなかった」

「……えっ？」
「励まそうと思って、何度も電話をかけようとしたけど、勇気が無くてやめたんだ。手紙も書いたけど出せなかった。いくつか思いついても、今日まで何もできなかったんだ」
震えてもいい。たとえ声が出なくても、情けなくてもいい。打ち明けたいという気持ちが僕自身を前に押し出した。
「俺の弱点はお前なんだよ。消せない一番の弱点……お前のことが好きなんだ」
張り詰めていた緊張が解けたせいなのだろうか。足元が浮いたように軽く感じて、ふらついた。好きだ。僕は鈴原のことが好きだったのだ。口から出したとき、初めて自分自身も認めたような気がした。築いてきたプライドの壁が破壊され、また一方で空に向けて飛ぶ羽が生えたように思えた。僕の心は自由になったのだ。
告白した後の高揚は続いていたが、僕はすぐに答えが気になった。いったい鈴原はどんな反応をしているのだろうか。僕は恐る恐る顔を上げて、彼女の様子を確かめた。
純粋に意表を衝かれた顔がそこにあった。そして何と呟いたのか、口元が微かに動いた気がした。それからほんのりと赤くなった頬に一筋の涙が流れていた。
結局、唇の動きが何という意味だったのか、僕にはわからなかった。告白の答えだったのかもしれないが、聞き返す前に鈴原は公園から走り去ってしまったのだ。
明かりの灯った公園にひとり、僕はどうして良いのかわからず立ち尽くした。

ｆｉｌｅ１８：夕暮れの告白（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file19：校門の外（前書き）

腫れ物に触るように接する貫太郎。そんな態度を指摘され、一層千博を悲しませてしまったことに気付いた。帰ってしまいそうになった彼女を引き止め、そしてついに自分の素直な気持ちを打ち明けたのだった。

file19：校門の外

翌朝、教室へと入った早々、僕は鮎川に階段まで引っ張られた。珍しく興奮した様子で尋ねてきた彼女に、僕は「うん」と「わからない」の言葉だけで答えた。とても恥ずかしくて詳しくは話せない。これからどうなるのか、むしろこちらが知りたいぐらいだった

期待はしていたのだが、鈴原は教室に姿を現わさず、待っていたのは何も変わらない退屈な学校生活だった。確かにクラスの男子生徒の一人が告白したからと言って、やはりそれとこれとは別次元の問題である。彼女の気持ちを察すると、決して強く望むことはできなかった。

いつまで待っても届かない返事。彼女の不在は僕にとって物足りない一方で心の平安ももたらしていた。辛い答えならば一生耳に入れたくない。今は失恋を認めたくなかった。

このまま初恋は有耶無耶で終わってしまうのだろうか。もしかしたら、これは優しい断わり方なのかもしれない。弱気になり始めていた週末の土曜日。僕は思いがけず、鈴原からの電話を受けた。

緊張を押し殺して受話器を握りしめた僕の耳に、珍しく控えめな鈴原の声が届いた。

「やっぱり、自転車教えてもらおうかなと思って」

イエスでもなければ、その反対にノーでもない。それは告白の返事ではなかったが、僕にとっては充分だった。約束を守れる。また鈴原と同じ時間を過ごせるのだ。

保健室登校の鈴原は全校生徒がいなくなった放課後に学校を出ていた。僕は一足先に家に戻ると、練習に使う自転車に乗って校門の

外で待った。
しばらくして、遠くからでも彼女とわかるほど待ちわびた鈴原千博がやって来た。
「お、おはよう」
ぎこちない僕の挨拶に、「もう夕方だよ」と笑って返してきた。図書館で会ったときよりも、また電話で話したときよりも明るく落ち着いているような気がした。
「あっ、そうだ。これ」僕はノートを手渡した。「今日、鮎川が休みなんだ」
ちょうど使い終わったから、返さなくていい。ヒゲのない猫の絵が載ったそれを僕は手渡した。
鮎川が尋ねた。
「返さなくていいの？」
「ああ。どうせ、捨てちゃうから」
練習に選んだ場所は草野球でよく使われている川沿いの空き地だった。休日以外は人もいないので好都合だった。
「はじめは感覚をつかむだけでいいからな」
ペダルはこがず、地面を蹴って走るように。自転車にまたがった鈴原へ僕は指示を出した。
バランス感覚を養ったあとは、サドルを持って補助をしながら走らせ、最後は支えていたその手を放す。幼い頃、父が教えてくれた練習方法だった。
眩しすぎた夏のせいだろうか。他愛もない会話を交わせることをいつの間にか、当たり前のように考えていた。確かに六月にも話せない時間はあった。しかしこれほどまで深刻には感じていなかった。本当に失うまで、失いかけるまで、これほど大切なものだとは気付かなかった。
季節がら陽が落ちるのが早い。黄昏時が過ぎて夜が寒さを連れてやってくると、僕らはどちらから言い出すでもなく家路についた。
放課後の九十分だけが二人でいられる時間だった。それでも一緒

にいると、沸々と湧き上がる感情が胸の奥をくすぐった。確かに今の自分は幸せなのだ。僕はそう実感した。

ｆｉｌｅ１９：校門の外（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２０：一人旅だもん（前書き）

告白の後、千博からは何の音沙汰もなく、次第に貫太郎は不安になり、絶望的な気持ちになっていた。そんな土曜日、彼女から電話がかかってきた。その内容は「自転車ののり方を教えて欲しい」というものだった。

file20：一人旅だもん

自転車を乗りこなすのに必要な時間はどれくらいだろうか。自分の場合は三日ほど必要だった。普通の人はもっと早いかもしれない。あるいは丸一日あれば、もっと効率よく練習ができたのかもしれない。しかし、そこはさすがに運動神経の良い鈴原である。二、三度転ぶことはあったが、僕が予想していたよりもずっと早く上達していった。

「大丈夫。これぐらいすぐに直せるさ」

練習に怪我も破損も付き物である。ごめんね、と不安そうな顔で何度も謝る鈴原に、僕は自転車よりも彼女のヒザの怪我を心配しながら言った。

「血も出てるみたいだし、今日の練習は終わりにしよっか」

夜空が染まりきるのに、まだいくらか時間があったので、僕らは並んで土手の傾斜に寝転がり、一番星が出るのを待った。

「今度のクリスマスにね、自転車を買って貰えそうなんだ」

おそらくおねだりをするつもりなのだろう。気前の良い鈴原のサンタクロースとは違い、こちらはまるで期待が持てなかった。何といっても去年が図鑑セットだったのだ。いくら主張しても結果は変わらなかった。だから今年が辞典セットでも不思議はないと思っていた。

僕は気を取り直して、明るい表情をつくった。

「そうか。じゃあ、乗れるようになったら何処かへ行こうよ」

何気なく口に出してから、あらためて妙案だと思った。そうだ。二台あればサイクリングができる。晴れた日に風を切って自転車を走らせるのは、何にもまして爽快なのだ。

僕はすぐに相づちが返ってくるものと期待したが、意外にもそれはいつまで待っても訪れなかった。

そんなとき、早川から聞いた数日前の話が僕の脳裏に浮かんだ。

鈴原を本屋で目撃したというのだ。受験用の参考書を選んでいたらしい。
沈黙で会話を切った後、それから鈴原はポツリと呟くように言った。
「知らない町に行きたい。どこか遠く、誰も私のを知らない所。私、そこで暮したいな」
僕はてっきり鈴原が学区内の同じ中学校へ進むものと疑っていなかった。彼女自身、六年が始まった頃は中学受験をしないと言っていた。心情が変わったとしたら、その原因はやはり九月の出来事だろう。
「俺も」僕は勇気を出した。「俺もそこに、一緒について行って良いか？」
すると少し意外だったのか、星を探す視線がこちらへと向けられた。真ん丸とした黒い瞳に対岸の明かりがキラキラと反射していた。
僕は気恥ずかしくて、無意味に夜空の一点だけを見つめた。
「駄目。一人旅だもん」
しばらくして返ってきた言葉。その答えに僕はゆっくりと目をつぶった。
「でも、だからかな」
「……えっ？」
「最近、上手くなっても嬉しくないんだ」
あんまりね、と付け足した鈴原の頬はほんのりと色付いていた。
「あっ、一番星」鈴原は指差して言った。
傷付けすぎたかもしれないと配慮したのだろうか。それならば有り得る。しかし、もしかしたら。
どういう顔をするべきか困惑する僕を放っておいて、鈴原は勢いよく立ち上がった。そして何か感情の起伏を隠すような笑みをつくり、振り返った。
「もし私がこの町からいなくなったらさ、そのときはちゃんと約束を守ってよね」

手を振って鈴原は元気に走り去った。今日はふたりで帰れない。取り残された僕は完全に暗くなるまで土手に寝転がることにした。

「守ってよね、か」

約束。約束ならば現にこうして果たそうとしている。ならばノートの猫の絵にヒゲを付け足すことだろうか。しかし、そんな些細なことではないように思えた。いったいどういうことなのだろう。

このときの僕にはさっぱり検討がつかなかった。

ｆｉｌｅ２０：一人旅だもん（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file21：おとうさん（前書き）

貫太郎の自転車を使い、千博の練習は始まった。もともと運動神経の悪くない彼女にとって、それほど難しいことではないように思えた。そして練習終わりの夕暮れ時、一人旅に出たいのだという話を聞かされた。

file21：おとうさん

季節は十二月となり、長かった小学校生活もあと三学期と少しを残すのみとなった。

当初、すぐに終わると思っていた自転車の練習は未だに続いていた。バランスのとり方もペダルをこぐ速さも申し分無い。残るは助走が付いたところで支えるこちらの手を放し、鈴原が自力で走行するだけである。あと一歩。しかしそれがこの一ヶ月、なかなか上手くいかなかった。

ヨロヨロと走り、上手くいったと思ったそのとき、急に速度が落ちて横へと倒れるのだ。本人によると、バランスをとることに集中してしまい、うっかりペダルをこぐ動作を忘れてしまうという。

毎日転んで衝突し、自転車は直しようがないほどボロボロだった。それよりも僕は鈴原の体が心配だった。彼女のヒザや腕には擦り剥いた傷や打ち身によるアザがいくつもでき、目立つようになっていた。

何といっても女の子の体である。僕は再三再四中断しようと忠告した。とりあえず傷が癒えるまで待って欲しかった。

しかし、鈴原は首を縦には振らなかった。頑として練習を続けた。毎日傷だらけになり、それでも次の日の夕方にはちゃんと校門の前で僕に声をかけてきたのだ。

はじめの頃は単純に嬉しかった。けれど次第に不安が大きくなって、その意図を推測してからはむしろ辛さの方が増していった。

確信はもてない。それでも、疑いは強くなっていた。やめてほしいと願った。鈴原が転ぶたびに僕の心は痛くなった。

とうとう耐えられなくなった平日の夕方。練習を終えた帰り道で僕は意を決して荷台に乗る鈴原へ尋ねた。

「本当はもう乗れるんじゃないのか」
故意にペダルを踏む足を止めている気がした。さらに体もわざと傾けているように思えたのだ。
視線を合わさず、鈴原はひと言発した。
「乗れない」
僕が怪我が治るまで中止にしようと提案しても、鈴原は認めなかった。首を横に振った仕草が背中でわかった。また「やめたい」と言っても「約束なんだから」と抗議してきた。
僕は強い口調で言った。
「約束破りって言われてもいい。怪我を治すまで自転車は貸さないからな。その代わり――」
するとその直後、電柱の影からひとりの大人が現われ、僕達の行く先を塞いだ。
サラリーマンだろうか。スーツにネクタイ。片手には革カバンを握っていた。自転車を止めて見上げた男の形相はまるで鬼のようだった。
男は僕を睨みつけ、低い声で唸った。
「娘に怪我させてるのはお前か」
「お父さん！」
正面の鬼、それに加えて背後から聞こえた声に、僕の頭は真っ白になった。
真っ赤な顔のサラリーマンは鈴原のお父さんだった。どうやら見張っていたらしい。毎日汚れた服で帰る傷だらけの娘を心配したのだろう。当然、九月に起きた出来事も担任の口から伝えられていたと思う。状況証拠だけを見て考えれば、僕はいじめの容疑者だった。
「こっちはお前かと聞いているんだ！」
カチコチに固まった僕へオジサンは容赦なく怒鳴りつけた。子供を守る親の力を初めて見せつけられた。恐ろしくて意識を失いそうなほど、凄まじい威圧感と迫力だった。
「違うの！」

荷台から降りた鈴原が慌てて割って入った。
「石井には、石井君には自転車を教えてもらってるの！」
「嘘をつくんじゃない！」
それからのことは漠然としていて、よく憶えていない。確か鈴原は真っ赤な顔で反発しながらオジサンに引っ張られて帰った。一方の僕はたんまり山盛りの脅しを土産にもたされたようだ。『名前は憶えたからな』とか『担任や親に話してやる』、さらには『二度と娘に近づくな』や『今度見かけたらタダじゃ済まさない』などといった文句だったと思う。
こうして僕は放心状態のまま、夢遊病患者のように家路へとついた。

ｆｉｌｅ２１：おとうさん（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file22：お別れを言うために（前書き）

指導により、自転車の腕前は確実に上達していた。しかし、後もう少しというところで必ず転ぶ千博。貫太郎には、彼女がわざとそうしているように思えた。そんなある日の帰り道、千博の父親と鉢合わせた。転んで出来た怪我を見て、いじめられていると誤解されたことから、練習を続けることができなくなってしまった。

ｆｉｌｅ２２：お別れを言うために

思いがけず第三者の手によって練習が打ち切られてから日にちが経って、二学期も終業式を迎えた。

鈴原は依然として教室へ現れなかった。説得が通じたのだろうか。それとも脅しだけだったのだろうか。彼女の父親が怪我のことを報告した様子はなく、恐れていた先生からの呼び出しも、また両親からのカミナリもこちらへはふりかかっていなかった。

今日は冬休みの前日であると同時に、クリスマスでもあった。はたして鈴原は自転車を買って貰えたのだろうか。僕はそれが気になっていた。

「ちょっと話があるんだけど、いい？」

帰りの挨拶が終わり、通信簿をランドセルにしまおうか、このまま捨ててしまおうか悩んでいた僕に、学級委員の鮎川が声をかけてきた。なにやら内緒の話らしい。場所を変えたいようだったので、ひと気のない階段の踊り場へと移った。

「千博から手紙を預かったの」

僕達はあの日を最後に一度も会っていなかった。電話もしていなかった。全く連絡の取れていなかった鈴原からの言葉に、僕の心臓は高鳴り、胃は収縮した。

「何て書いてあるの？」

興味深げに鮎川が聞いてきた。どうやら何も聞かされていないらしい。

咳払いを一回。それから僕は慎重にセロテープを外した。

ノートを破って折り畳んだだけの簡素なつくり。鈴原らしい手紙の文章は謝罪からはじまっていた。

この間のこと、ごめんなさい。

お父さんもわかってくれて、少し早めのクリスマスプレゼントとして自転車を買ってもらいました。
それからひとりで練習をして、ようやく乗れるようにもなりました。
だから今日、私は旅立つつもりです。
最後にもう一度、ちゃんとしたお別れがしたいので会いたいです。
午後四時に駅の南口で待ってます。

西の空がオレンジ色に染まり始めた駅前のロータリー。大きな荷物を負ぶって新品の自転車へまたがる鈴原に僕は声をかけた。
「男物なんだな」
ピンク色のいかにも女の子らしい種類か、一般的な自転車だと思っていた。けれど鈴原に魅力を感じさせたのは見た目よりも速さだったらしい。選ばれたのは八つもギアがある黒色のスポーツタイプだった。
「どうして」それが鈴原の第一声だった。「なんで石井がリュックを背負ってるの」
もとから告白の返事などは期待していなかった。しかし、お別れですと言われて、はいそうですかと納得できるはずがない。家出となれば、なおさらだった。
「お別れを言うために手紙を書いたんだよ」
「知ってるよ」
「じゃあ、どうしてそんな格好をしてるの」
「そりゃ一緒に行くからだよ」
一見噛み合っているようで、そうでない会話はしばらく続いた。こっちが頑固ならば、向こうもそうなのだ。
だけど、今回は状況が後押ししたのだろう。無駄な体力を消耗したくないと思ったのか。何も言わずに鈴原は出発した。
後に続いた僕は前を行く鈴原に尋ねた。

「何処へ行くつもりなんだよ」
無視を決め込んだつもりらしく、答えは返ってこなかった。それでも向かう方角からなんとなくわかった。町の南には自転車の練習で利用した土手の空き地がある。川沿いの道を下流に進み、海へ出ようとしているのではないだろうか。
一時停車の機会は思っていたよりも早く訪れた。入り口に自転車を止めて、鈴原は町外れの小さな神社の境内へと入っていった。
自転車が置いてあるため、僕は行動を供にしなかった。いったい何をしていたのだろう。しばらくして出てきた鈴原の目は少し赤く腫れているようにも見えた。
「約束、忘れちゃってたんだね」
再び出発させるとき、独り言ともとれるような様子で鈴原は言った。
憤りというより、寂しさのほうが強かったのかもしれない。それは後にわかる僕の罪に比べれば、あまりにささやかすぎる批難だった。

ｆｉｌｅ２２：お別れを言うために（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２３：夜を走る（前書き）

クリスマスプレゼントに自転車を買ってもらった千博。彼女はそれで旅に出ようとしていた。自分のことを誰も知らない土地で気持ちも新たに暮らしていきたい。しかし、見送りに来たはずの貫太郎の背中にはリュックサックが背負われていた。

ｆｉｌｅ２３：夜を走る

慣れない自転車での旅は本人はもちろんだが、後ろを走るこちらにも精神的な疲労を強いた。鈴原が体勢を崩して倒れそうになるたび、またブレーキのタイミングを謝って車と接触しそうになるたび、僕の体は固まり心臓は止まりそうになった。ヨロヨロと危なっかしく自転車を操る彼女の背中が頼りなげであり、また心配だった。

いくつかの橋を横切り大きな町を越えた。そしてようやく海辺の通りへと辿り着いた頃には深夜をまわっていた。

月が出ていないせいか、暗くて浜辺の様子は全くわからなかった。まるで深い霧の中のような漆黒の世界が広がっていた。繰り返す波の音と鼻を刺激する磯の匂いだけが、海がそこにあるのだと暗示していた。

街灯と道路標識を手がかりに、僕らは会話も交わさないまま黙々と自転車を走らせていた。

ジッと見つめると吸い込まれてしまいそうな気さえしてしまう。夜の海は黄泉の国へとつながっているかのように不気味で、不思議な魔力を持っていそうだった。時折りすれ違う自動車のヘッドライトが恋しく思えた。

寒さから逃れるようにファーストフードのチェーン店に入った。

店内は深夜のためか音楽は流れておらず、淀んでいるような暖かい空気で満たされていた。そして僕達の他に客はいなかった。

ハンバーガーにポテト、コーラを載せたトレイをそれぞれ運んだ僕たちは自然と同じ窓際のボックス席に向かい合って座った。

ソファーにもたれて、僕はあらためてふくらはぎや太ももものだるさに気付かされた。それはそうだと納得させられた。もう十時間近く走り続けてきたのだ。

くつろぎ始めた僕とは対照的に、レジにいる店員の目が気になったのか、鈴原はそわそわとして落ち着きが無かった。確かに通報さ

れたら、タダで済むはずがない。以前、警察に捕まったら指紋を採られるのだと聞かされたことがあった。
僕はコーラをひと口喉に通してから話しかけた。
「やっと、とうとう海まで来たな」
「とうとうって……旅はこれからだよ」
気丈に振舞ってはいるものの、やはり鈴原の顔にも疲れが出ていた。
いったいあとどれくらい頑張るつもりなのだろう。それよりもどうして家出をしようなんて考えたのだろう。
疲労から食欲はなかった。それでも何か胃に送らなければいけないと思い、僕らは飲み物と一緒に無理やり流し込んだ。
クリスマスだというのに、ケーキもなければ、ツリーも楽しい会話もない。何もない静かな時間は煌々と明かりに照らされているにもかかわらず、僕に睡眠の欲求を運んだ。
寝ている間に鈴原はいなくなってしまうかもしれない。いけないとわかっていた。それでもそのときは音もなくやってきた。睡魔は確実にこちらを狙っていた。僕の隙を見逃さなかったのだ。

ｆｉｌｅ２３：夜を走る（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２４：夜明け前（前書き）

千博と貫太郎は黙々と自転車を走らせ、海辺にやってきた。寒さから逃れるように入ったファーストフード店。逃亡中の犯罪者のように、警察へ連絡されないかと不安になりながら、貫太郎は疲れから眠くなってしまった。

ｆｉｌｅ２４：夜明け前

意識の中では一瞬の出来事だったが、それでも数時間は経っていたらしい。外はまだ薄暗いが、日の出ももうじきのようだった。店員の女性に起こされたとき、向かいの席にいたはずの鈴原は消えていた。

言伝もなければ書置きもなかった。慌てて店から飛び出した僕だったが、すぐに動揺は収まった。平静を取り戻した理由は駐輪場にあった。深夜から置いていた僕の自転車。その横に鈴原の物も並んで止めてあったのだ。

まだ鈴原は出発していなかった。おそらくこの辺りを散策しているのかもしれない。少し安心して海の方を眺めると、案の定、彼女の姿はそこにあった。

砂浜に座り、独り寄せては返す波を眺めているようだった。遠い間だし、後姿だったからどんな表情をしていたのかわからない。けれど、なぜかいつも強気な印象を与える彼女の背中が、このときはやけに小さく儚げに感じた。

僕は鈴原のもとへ行こうかためらった。どうやって声をかけたら良いか、思い付かなかったのだ。それに彼女が何を考えているのか、それを知るのが少しだけ怖かった。

ただ、こうしてガードレールに手をかけて見ているのにも限界があると思った。僕は少しだけ勇気を出そうと決め、そして極力楽観主義になろうと心に留めて浜辺へ向かった。

何も言わず隣に座ると、朝陽が水平線の向こう側から現れるのを待った。横顔は確かめなかった。

しばらくして、鈴原のほうから僕に話しかけてきた。

「冬の海って、何だか寂しいね。夏の元気をみんな使ってしまったみたい」

鈴原は怒るでもなく、また泣くでもなく、ただ遠い目で水面を見

つめていた。
「これから、どうするんだよ」
「帰るよ。無理だってわかったから」
家出をした子供が大人の作った社会の中で生きていくには限界がある。こちらが眠っていた数時間の間に、鈴原は心の中でそんなひとつの現実を受け止めたようだ。でも、知ることと認めることとは違う。彼女の突っ張ったような言葉の語尾に、三ヶ月誕生日が遅いはずの僕は少しだけ年上になったような気がした。
ここで冒険の旅が終わる。そう思うと、やっぱりと納得する一方で、どこか残念な気持ちにもさせられた。所詮、長くは続かないだろうと理解していたし、それほど期待していたわけでもない。ただ、もう手を伸ばせば、もしかしたら新しい何かが手に入ったかもしれない、ふたりだけの生活があったのかもしれないと、ほんの少しだけ思えたのだ。
僕の顔をチラリと一瞥して、鈴原は尋ねた。
「石井さ、まだ……私のこと好き？」
ドキン。心臓が激しく打ちつけた。
好きでなければ、こんな無謀な計画に付き合ったりはしない。とっさに喉元まで出かかった饒舌な台詞は無理やり胃の中へと押し戻された。自分には上手く言えないと悟ったのだ。だから、僕は黙ってうなずいた。
すると、鈴原は微かに頬を染めながら、それでいてどこか悲しげな表情で首を横に振った。
「すぐ嫌いになるよ」
「俺は……嫌いになんかならないよ」
「なるよ。絶対になる」
「ひとの気持ちを勝手に決めるなよ」
少しムキになって返したが、それでも鈴原の様子は変わらないようだった
つまんだ砂を僕の足へ投げて、鈴原は非難するように言った。

「石井はまだ子供なんだよ」
話を続けるのも億劫なのか、鈴原はそれから目を閉じて黙り込んだ。
僕は鈴原の予言に不安を覚えた。確かにあの日の出来事を振り返るたび、そして鈴原のことを考えるたびに心がジクリと痛んだ。細長い針で刺されたような感覚が胸の奥にまで届いた。まるで鈴原千博が汚れたのだと、そう心の中で刻印が押されているようだった。
鈴原千博は汚れた。決してそうではない。鈴原は何も変わっていない。頭ではわかっていた。しかし、わずかな道徳が教科書通りの反論を繰り返しても、この焼き付いた捉え方はどうしても僕の中から消えることがなかった。むしろ深く想えばそれだけ、葛藤が強くなっている気がした。だから僕は意識的に考えないようにしていた。そんな卑しさを看破されてしまったのかもしれない。
何度か鼻を啜ったと思っていたが、気付くと鈴原は泣いていた。ひざの間に顔をうずめ、涙を隠していた。
「帰ろうか」僕は言った。
こうして僕らの時間は日常へと戻った。もう夏は終わったのだ。

ｆｉｌｅ２４：夜明け前（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file25：チョコレート（前書き）

子供の力では限界があると思い知らされた千博と、わかっていながらそれでも同行した貫太郎。今は好きでもいずれ成長すればそうでなくなる。自分の気持ちは変わらないという貫太郎の訴えは彼女の心には届かなかった。

file25：チョコレート

家出に同行して、しこたま大人達に怒られてから再び何もない退屈で平凡な時間が過ぎた。もはや鈴原の姿は保健室にも構内のどこにもなかった。学校の代わりに通っているのは、隣町にあるフリースクールらしい。それと中学受験はやらないことにしたようだ。どれも情報通の早川から少しずつ聞きだした噂話である。家出の失敗以来、彼女とは一度も話していなかった。会うことが許されなかったのだ。

女は男よりもずっと変わり気な生き物だ。そんな脅しのような冗談を早川から聞かされたのは、卒業を間近に控えた二月のバレンタインデーだった。単に大人ぶってみせただけかもしれない。決して誰かを特定して言ったわけではないのだろう。けれど、そのときの僕には違って聞こえた。ある種の説得力をもって不安な心に迫ってきた。

今頃、アイツは何をしているのだろう。誰といるのだろう。生まれた疑問は不安を糧にすくすく大きくなった。

だから放課後、僕は鈴腹に会おうと決めた。

学校のように大きな施設ではない。日も暮れかかり、オレンジがかった路地の一角に、フリースクールはこじんまりと営まれていた。かつての幼稚園を利用しているらしい。背の低いブロック塀を隔てて、敷地の中からデタラメなピアノの音と子供の遊び声が聞こえた。

勇気がないためか、それとも他に理由があったからだろうか。僕はここまできて、なお足を踏み入れることができなかった。かといって、他にどうする術もありはしない。ただ、敷地の中を眺めて待つしかなかった。

鈴原を目にしたとき、僕の心臓は跳ね上がるように高鳴った。建物から出てきた彼女。姿を見るのは、およそ二ヶ月ぶり。少しだけ大人っぽくなった気がした。

「す、鈴――」呼びかけた僕は口を閉じた。
会話の相手は中学生くらいだった。年上の男友達だ。楽しそうなふたりの話し声が僕のところまで届いた。
少し照れくさそうな仕草をする年上の男と白い歯を見せて笑う鈴原。そしてチョコレートが入っているだろうオシャレな包みの贈呈が行われ、ふたりは別れた。
フリースクールから出てきた男子生徒に話しかけられないよう、僕は視線を逸らしてやり過ごした。
女の恋はネズミの寿命よりも短い。朝聞かされた早川の言葉が身に沁みてわかった気がした。そもそも相手に恋心などあったかすら疑わしいが。
顔から血の気がひき、深い思考できそうもなかった。それでいて何故だか妙に納得できていた。
トボトボと帰ろうとした僕の背中に声がかかった。
「石井！」鈴原だった。
丸くさせた大きな目が確実にこちらを捉えていた。それでも僕の間抜け面よりは数段マシだったろう。なにせパクパクと口を開け閉めして、言葉にならなかったのだから。
こちらへゆっくりと寄ってきた鈴原は少しバツが悪そうな様子で言った。
「お父さんが、お父さんから石井と話しちゃいけないって言われたから」
だから年上の彼氏をつくっちゃいました。僕の心は言葉の続きを勝手に補った。要するに僕の思いは無駄だったのだ。あの夏の朝も、心配して苦しんだ日々も、家出に同行した寒い夜も。むしろ、こちらの努力は全て鈴原にとって重荷に過ぎなかったのだ、と。
「あの、さっきの人は吉田君っていって――」
「お似合いじゃないか」
説明を遮るようにして、僕は声を絞り出した。発せられた言葉は想像以上に乱暴に出来上がってしまった。

「アイツもここの生徒なんだろ？　不登校同士お似合いじゃないか」
本当はもっと気の利いた台詞を口にするつもりだった。しかし前もって用意していたわけではないし、何よりも強がりが混ざっていたのだ。
すると、やはり鈴原の表情が歪んだ。
「そんな、そんな言い方ないよ」
予想に反して、鈴原の声にはこちらの悪態を跳ね返すだけの勢いがなかった。一拍おいて呼吸と一緒に口から出た言葉。それは心から溢れ出た吐息と似ていた。代わりに僕は強い後悔と動揺を覚えた。

ｆｉｌｅ２５：チョコレート（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２６：呼び出し音（前書き）

千博の通うフリースクールへを見ようとした貫太郎。しかし、そこで目にしたのは中学生らしき男子にチョコレートを渡す彼女の姿だった。とっさに、悪態が口から飛び出し、貫太郎は後悔した。

ｆｉｌｅ２６：呼び出し音

フリースクールが不登校になった生徒達の受け皿だということは知っていた。だから、吉田というあの中学生も何かしらの問題を抱えているのかもしれない。イジメが原因だろうか。

僕は無意識のうちに差別していた。フリースクールに通う彼らを弱い奴らだと蔑んで、壁をこしらえていた。だから間違われるのが怖くて敷地に入れなかったのかもしれない。そんな卑しさが心のどこかにあったから、簡単に言葉となって出てしまったに違いない。

慌てて逃げ帰った夜、モヤモヤとした気持ちを抱えきれず、僕はとうとう鈴原の家へ電話をすることにした。

父親が受話器をとるかもしれない。運良く鈴原が電話に出ても、こちらが誰かとわかったらすぐに通話を切られてしまうかもしれない。それでも挑んでみたかった。ただ真剣に謝りたかった。

トゥルルルル。トゥルルルル。トゥルルルル。三回目の呼び出し音の後、電話に出たのは鈴原だった。

「今日のこと、ゴメン。謝ろうと思って」

たとえ、たどたどしくても、決して不必要な言葉は使わないように。僕は率直な気持ちを伝えようと努力した。

そして一方的な謝罪の後、鈴原は気にしていないと落ち着いた口調で返した。それから、吉田が恋人ではないと否定した。父親に堅く禁じられていて、今まで電話ひとつできなかった、とも言っていた。

幸いにも鈴原の父親は残業でいなかった。いつもはフリースクールへの送り迎えもしているらしい。

僕らはもう一度会う約束をした。

待ち合わせの場所は町外れの神社だった。街灯はあるものの、何

か出てきそうで夜の境内は薄気味が悪かった。だから、明かりの下で待つ鈴原を見つけたとき、僕はホッと安堵の溜め息をついた。

「クリスマス以来だよね」あらためて鈴原は言った。「二ヶ月くらいかな」

僕が会いたくて仕方がなかったように、鈴原のほうも思ってくれていたらしい。彼女のそれが友情なのか、また別の気持ちなのかはわからない。それでも充分だった。

学校のこと。そしてフリースクールのこと。会えなかった空白を埋めるかのように、僕らは夢中で平凡な毎日を話し続けた。それはお互いに息継ぎを忘れるほどで、二月の寒さも気にならなかった。

ｆｉｌｅ２６：呼び出し音（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２７：大切に守ってね（前書き）

駄目もとで電話をかけて悪態をついたことを素直に謝まることが出来た貫太郎。そして、ふたりは町外れの神社で会った。

file27：大切に守ってね

続いていた会話が終わりを迎え、やがて途切れたとき、街灯を見つめていた鈴原が不意に呟いた。
「今夜、世界が壊れて欲しいな」
「えっ？」
「だって……楽しかったから」
それから鈴原は冗談だと寂しげに笑ってみせた。刹那的な表現が嬉しい反面、とても哀しかった。
僕は話題を切り替えた。
「そうだ。俺が忘れたっていう約束を教えてくれよ。この神社が関係してるんだろ？」
ヒントは記憶に残らないほどの古い約束で、家出のときに、鈴原がここへ立ち寄っていたということ。しかし、不覚にも、それだけでは何も思い浮かばなかった。
鈴原は少し顔を曇らせたが、やれやれといった具合で、一角を指差した。
「そこの梅の木。あの苗木を四年のときに埋めたんだよ」
あれは小学四年生の夏休みの出来事だった。誰もいない校庭で自転車を乗りまわしていた僕は校門からこちらを見つめる視線に気が付いた。小さな麦藁帽子に白いワンピース姿の女の子だった。
同じ学年の転校生なのだと聞いて、僕はこの町を案内することにした。公園におもちゃ屋、そして自分の家。自転車の荷台に乗せていろんな場所を走った。
やがて夕方になり、お囃子の音が聞こえてくると、僕は祭りが行われるこの神社に連れてきた。そこで、どういう理由だったか、お婆さんから梅の苗木を貰ったのだ。
女の子の住まいはアパートで、僕の家にも植える余裕がなかった。だからこっそりと神社で育てることにした。そこで約束をしたのだ。

「もし転校しても、大切に守ってね」鈴原は再現して言った。
そういえば、と思い返して僕はハッとした。確かにそんな出来事があった。しかし、こちらにしてみれば長い夏の一ページであり、次の日にはすっかり忘れてしまっていた。
さらに驚かされたのは、あのときの女の子が鈴原だったということだ。麦藁帽子を被っていたから、顔がよく見えていなかったという理由もある。しかし、何よりも大きな原因はその印象だった。女の子は活発というよりも、色白で大人しい雰囲気だったのだ。彼女が鈴原だったとは、全く思いもよらなかった。
ようやくのみ込めた僕は深く頷いた。
「そっか。だから怒ってたのか」
「別に怒ってないよ。ただ、残念には思ったかもしれないけど」
梅の木は未だに細いが、何倍も大きく成長していた。根本の土には薬の入った瓶が刺さっていた。きっと鈴原が手入れをしていたのだろう。僕が忘れてしまい、世話を怠ってきたこの二年と数ヶ月。ひとり彼女が守ってきたのだ。
鈴原はうつむき、溜め息を吐いた。
「実はね、今度……中学になったら、この町を出るかもしれないんだ」

ｆｉｌｅ２７：大切に守ってね（後書き）

お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２８：二月の終わり（前書き）

不意に会話が止まり、沈んだ表情を見せる千博。貫太郎は彼女と交わした約束を思い出す。二人でもらった梅の木を大事に育てていくこと。そのことを貫太郎はすっかり忘れてしまっていた。そして千博は自分がこの町を出て行くかもしれないと話した。

file28：二月の終わり

これから思春期を迎える中学校生活を考えて、両親が話し合いを行ったらしい。そこで、夏に泊めてもらったあの実家で暮らす話がもち上がったそうだ。同じ女である自分の方が理解できると母親は主張した。一方の父親は力不足を自覚してか、ついに否定できなかったそうなのだ。あの日の出来事だけではない。家出をしたことも、また大きな要因となったに違いなかった。それらは鈴原にとって全くの予想外だった。

鈴原は結果的に裏切るかたちとなってしまったことを後悔していた。自分のわがままが父の立場を苦しくして、しかも心を深く傷付けたのだ、と。しかし、母親が嫌いなわけでもなかった。実家で暮らせば、新しい生活も待っている。どちらが良いのだろうか。

そんな大人の事情が絡んだ鈴原の悩みとは裏腹に、一方の打ち明けられた僕はもっと単純に受け止めていた。

鈴原が引っ越す。鈴原千博がこの町からいなくなってしまう。いつの間にか忘れていた。ずっとこのまま付き合っていけるものと思っていた。保証などどこにもなかった。腐れ縁など、存在しなかったのに。

「だから、今度こそ約束を守ってよね」

鈴原はいくらか話した後、蒼白となった僕にそう言って微笑んだ。

僕はためらいがちに尋ねた。

「やっぱり、この町を出たいのか？」

すると鈴原は首を横に振った。

「確かにあの時は、どこかへ行ってしまいたいって思ったけど、でも今は嫌かも。だって……」

もう会えないかもしれないから言うけど。言葉に詰まった鈴原は間をとってから決心したように言った。

「この町を出ようとしたとき……一緒に来てくれて、本当は嬉しか

ったんだ。いけないって思いながら、それでもやっぱりどこかで安心してた」
だから、そう思ったときから家出の目的は崩れてしまったのだ、と。
鈴原は立ち上がり、それから僕の何歩か前に立った。
「石井と同じクラスでいられて良かった」
僕は抱きしめたい衝動に駆られた。きっと生まれて初めてのことだろう。この町を離れるかどうか。それは大人の都合であり、鈴原自身が決められることではないと知っていた。それでも彼女を掴んで離したくなかった。そうでもしなければ、一生後悔してしまいそうな気がしたのだ。
しかし、僕はできなかった。鈴原と自転車を残して神社から逃げだしたのだ。どうせなら、家出を続けていればよかった。自分が弱いと実感した。奥歯を噛み締め、下を向いてひたすら走った。
二月の終わり、引越しの噂を僕は早川から聞いた。

ｆｉｌｅ２８：二月の終わり（後書き）

次回でこのお話は決着します（３０話はエピローグ予定）。お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

ｆｉｌｅ２９：ヒゲのない猫（前書き）

千博が町から出て行くと聞かされ、逃げ出した貫太郎。そしてふたりの結末は……

file29：ヒゲのない猫

早熟の桜が咲き始めた三月。僕達の卒業式は行われた。

これで長かった小学校での生活が終わる。生徒会長の答辞を聞きながら、主役の一人であるはずの僕はいまいち実感をもてずにいた。

確かにこの学校で授業を受けることはない。しかし、十人のうち七人は同じ中学校へと繰り上がるのだ。残りの三人にとっても、別の学校生活が用意されている。そんな通過儀礼でしかないはずの式が、とりわけ切なく思えるのは、きっとそれぞれに大切な別れが用意されていたからだろう。また、そうでなくても、ただ雰囲気に流されただけでもいい。はやしたてる男子にもめげず、涙を流せる女子を僕は羨ましく思えた。

突っ張って我慢していたからでも、空気に乗れなかったからでもない。僕が泣けなかった理由は悲しみや寂しさ自体をそれほど感じていなかったからだ。

僕は未だに別れを認められずにいた。だから、奪ってしまおうと考えた。往生際が悪いかもしれない。それでも今度こそ、鈴原を連れて遠くへ逃げてしまおうと決めていた。

みんなが集まる場には出られないとわかっていたので、僕は前もって手紙を送った。あらためて自分の気持ちを文章にして、放課後の教室で待っていると綴った。待ち合わせの時間は四時。クリスマスのときと同じだった。

もちろん捕まってしまったらおしまい。それ以前に鈴原が教室に訪れなくても、冒険は終わってしまう。僕にとって、これは最後の賭けだった。

誰もいなくなった教室で僕は約束の時間が来るのを待った。校舎内はシンと静まり返り、廊下を歩くだけでその靴音が同じ階全体に届く。自分の席に座り、空になった机や『卒業おめでとう』と太く書かれた黒板の文字を眺めていた。

僕は目を閉じた。遠足や運動会、それに学芸会。昨日までは窮屈で退屈な毎日に感じたが、こうしてみると、そうでもなかったように思えた。まだ感慨を覚えるとまではいかない。それでもあと十年、二十年後に振り返れば、きっとセピアがかった写真を切なく思えそうな気がした。そのとき、傍らに彼女がいてくれたら。そうあって欲しいと僕は望んだ。

新しい生活。僕達ふたりの旅は大人達を渋々納得させた。
そして相変わらず平凡な毎日が待っていた。
朝、待ち合わせていた鈴原と同じ中学へ向かう。他愛もない話に笑い、ときにつまらないことで喧嘩もする。
本当に単調な日常。変わったことといえば、お互い制服姿になったことと、通うところが小学校から中学校になったくらいだ。
だが、それが僕には心地よかった。何よりも掛け替えのないものだと気付いたのだから。

ふと、目を開けると夕暮れ時で、青かった空はすでにオレンジがかっていた。まだ卒業式の放課後だった。
眠っていたことを知った僕は慌てて教室の時計を見た。
四時三十分。時間は過ぎていた。
夢があまりに幸せだったため、僕は与えられた現実を容易に直視できなかった。しばらく呆然としていた。
勝負は終わったのだ。鈴原は来なかったのだ。何度、言い聞かせても、痛みも悲しみも生まれなかった。まるで心が乾いてしまったように思えた。
ただ、一方で不思議な感覚が存在していた。ひんやりとしていたはずの教室が、少しだけ暖かくなった気がしたのだ。それにどこか覚えのある匂いが残っていた。花の香り。鈴原の匂いだと気付いた。

教室中を見渡した。教壇の裏、ロッカーの一つひとつを探した。
それでも、見つからなかった。
僕は罪悪感を感じながらも、掃除の用具入れのドアを開けた。
見慣れた箒が四つにバケツとちりとり。やはり、そこには誰もいなかった。
つまらないことをしてしまった。溜め息しか出ない僕は今、どんな情けない表情をしているのだろう。
フラれた男の顔を想像しながら、僕は自分の座っていた椅子を戻そうとした。そのときだった。
「これは……俺のノート」
机の中に一冊、使い込まれたノートが入っていた。ひと目でわかった。鈴原にあげたはずの僕のノートだった。
どうしてこんなところにあるのか。考えが追いつかないまま捲っていくと、その答えは最後のページに載っていた。

ありがとう。　私も石井のことが好きです。

ページの隅に控えめに書かれた小さな文字を僕は指で擦ってみた。夢でも幻でもない。何度擦っても、決して滲まなかった。
つい先ほどまで、この教室に鈴原がいたのだ。そのことを知った僕は窓に駆け寄り、急いで内鍵をはずした。
窓を開けた瞬間、目をつぶるほどの冷たい風が桜の花びらとともに入ってきた。もう日は西に落ちかかっていた。僕は目を凝らして、校庭中を探した。
誰もいないひと気のない校庭。厚手のコートを着た少女が校門を出ようとしていた。遠く、後姿だけだったので、確信はもてなかった。それでも、僕はいてもたってもいられなかった。
「鈴原、俺もお前が好きだ！」

角を曲がり、消えてしまいそうな背中に僕は命一杯の声を張り上げて叫んだ。
もう間に合わないだろう。それでも追いかけたい。
僕は鈴原に会いたくて、走って教室を出ようとした。
ドン！
勢いよく廊下に出たところで、僕は人にぶつかってしまった。「キャッ」という小さな悲鳴が聞こえたから、女子であることは疑いなかった。
慌てて距離をとり、誰だったのかを確認した僕は次の瞬間には声を失った。途端に身体が硬直してしまった。
目の前に立っていたのは鈴原千博本人だったのだ。
鈴原は言いずらそうに口を開いた。
「あの、ヒゲを書き足すのを忘れちゃって」
僕の大声が聞こえていたのだろう。鈴原の頬はすでに赤く染まっていた。そして僕の顔も赤くなった。

ｆｉｌｅ２９：ヒゲのない猫（後書き）

次回、３０話はエピローグ予定です。お時間があれば、ぜひ評価をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。

file30：そして、それから（前書き）

エピローグ。

file30：そして、それから

中学生になり、夏休みになって、僕は海へと向う列車の中にいた。単調な走行音も橋を越え、トンネルを抜けるたびに小さく変わった。神社の梅の木には多めに水をやったから心配ない。去年はふたりだった列車内。今年は一人旅だ。

ホームに降りたとき、駅前のロータリーを走る自転車を見かけた。ショートカットに小麦色の肌をした女の子が乗っていた。

こちらには気付かず辺りをまわっていたが、声をかける前にどこかへ行ってしまった。それはそうだ。待ち合わせの時間まではあと一時間以上もあるのだ。僕は少しだけ笑った。

約束までに時間があったので、僕は例の場所へと向かうことにした。一年ぶりだ。どうなっているのか不安な気持ちもあった。

洞窟を抜けて広がる一面の青い世界。秘密の海岸は美しいまま僕を迎えてくれた。

すると、横から声がかかった。

「これって抜け駆けだよ。二人で来ようって言ったじゃん」

僕よりも前に到着していたらしい。自分だって来ていると、こちらは同罪を指摘したが、地元は特別だと言い張ってきかなかった。

並んで海を眺めるのは一年ぶりだった。こうして夏が好きになれたことは、僕にとって大きな成長だったと思う。恥ずかしくて、感謝の言葉は未だに口にできていないが。

コホン。ひとつ咳払いをしてから、鈴原が尋ねた。

「ところでさ、どうして石井はここへ来たんだっけ？」

「なんだよ。お前が――」

反論しかけて僕はやめた。きっと、鈴原は「会いたかった」と言って欲しいのだ。

それから少し考えて、僕は答えた。

「えーと、猫のヒゲを付け足してもらいに来たんだよ」

思いっきり顔に砂をかけられ、僕は仰け反ってしまった。口の中がジャリジャリとして気持ちが悪い。
応戦をしようとしたら、すでに鈴原は波打ち際まで逃げていた。
僕は彼女を追いかけて海へと走った。
中学一年となった鈴原は元気そうだ。

了

題名『ヒゲのない猫』
著者　蒼井　果実

ｆｉｌｅ３０：そして、それから（後書き）

これでふたりの話はおしまいです。最後まで『ヒゲのない猫』を読んで下さり、ありがとうございました。お時間があれば、ぜひ評価・感想等をお願いします。小説とは別にコミックメーカー３を使用したＰＣゲームとしても無料で配布しています。興味のある方はｖｅｃｔｏｒ等でダウンロードしてください。　それでは、また他の物語でお会いしましょう。

『勝手にランキング』という設定を加えました。押すとランキングが上がる？らしいので、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2133g/

ヒゲのない猫

2010年10月8日13時37分発行